

次頁料

RG'-0018

0005

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

ペリリュー島等戦没者遺骨収集に関する
報 告 書

昭和42年6月

厚生省援護局 調査課長 西 村 祐 造

同 調 査 課 松 井 英 一

目 次	頁
オ1 ペリリュー島について	1
オ2 ペリリュー島遺骨収集計画	2
オ3 遺骨収集実施の状況	5
オ4 所 見	25
別紙オ1 ペリリュー島遺骨収集資料	30
別紙オ2 ペリリュー島の現況	43
別紙オ3 火葬地等要図	47
別紙オ4 追悼の辞	48
別紙オ5 ペリリュー島遺骨収集を終つての挨拶	50
別紙オ6 グラムの戦跡	52

オ1 ペリリュー島について

- 1 ペリリュー島の概観、同島の戦斗、戦没者の状況及び従来の遺骨の収集状況は別紙オ1「ペリリュー島遺骨収集資料」のとおりである。
- 2 ペリリュー島の現況についてはアメリカ信託統治領パラオ支庁編「*This is Palau*」の抜すい別紙オ2のとおりである。

オ2 ペリリュー島遺骨収集計画

- 1 目的
主としてペリリュー島における戦没者の遺骨を収集して火葬のうえ内地に送還し、併せてグアム島北東部地区に残存しているといわれる戦没者の遺骨の状況を調査し、現地の状況これを許せばこれらの遺骨も収集送還する。
- 2 期間
昭和42年5月15日より6月6日まで
- 3 派遣職員
厚生省援護局調査課長 厚生事務官 西村 祐造
同 調査課 同 松井 英一
外務省北米局北米課 外務事務官 相川 竜夫
- 4 収集のための行動計画
次の表のとおり。

ペリリユー島 遺骨収集のための行動計画

日次	曜	行 動 概 要	摘 要
5月 15	月	東京発 22:45 (PAA819)	
16	火	グアム着 03:00	
17	水	グアム滞在 関係官庁挨拶、現地視察及び打合せ	
18	木	グアム発 12:00～コロール着 16:00 (TR200)	
19	金	支庁等挨拶、人夫雇傭打合せ、ボート予約	人夫雇傭契約
20	土	宿営材料、収骨材料、食料等調達 午後コロール発～ペリリユー着 (モーターボート)	モーターボート借上
21	日	北部及び南部の地形偵察	只 1台/日
22	月	作業細部計画立案	案内 (人夫) 2人×2日
23	火	北部地域の収骨作業 { 地表面 1,000m×100m× $\frac{1}{2}$ 坑道 2,000m	人夫 (現地人) 6人×4日
24	水		
25	木		
26	金		
27	土	南部地域の収骨作業 { 地表面 2,200m×450m× $\frac{1}{2}$ 坑道 3,000m	只 1台 人夫 6人×4日
28	日		
29	月		
30	火		
31	水	焼骨現地慰霊	人夫 5人
6月 1	木	ペリリユー発～コロール着 挨拶及び整理	モーターボート借上
2	金	コロール発 07:00～グアム着 13:00 (TR201)	
3	土	グアム島遺骨収集、焼骨	人夫 3人×2日
4	日		
5	月	挨拶及び整理	
6	火	グアム島発 05:45～東京着 08:05 (PAA828)	
備考		現地の状況により変更することがある。	

注：1 本遺骨収集の同行記者団は次のとおりである。

朝日新聞社	秋庭武美
毎日新聞社	吉沢敏夫
時事通信社	林宏

2 本遺骨収集は、昭和47年度の事業として本年2月実施の予定のところ、アメリカ側の同意回答が遅延し、3月6日より同月28日の間に実施することとして準備を進めていたが、3月2日コロール地区が85%の家屋被害の出る台風により同地区への入域を2か月間禁止されたため、5月15日より実施することとなつたものである。

3 本遺骨収集団の団長として業務才一課長山田義次が予定されていたが、同人疾病により入院のため調査課長西村祐造に変更された。

才3 遺骨収集実施の状況

5月15日夜本邦を出発し、ペリリュー島において5月21日より28日までの間に約1,300柱の戦没者の遺骨を収集、5月29日これを火葬して同島戦没者の追悼式を行ない。また、グアム島においては6月3日戦没者の遺骨2柱を収集して6月6日本邦に帰還した。

細部の状況は次のとおりである。

5月15日(月) 晴

22:45 パン・アメリカン819便にて東京国際空港出発
予定のところ同機延着。

5月16日(火) 晴

00:00 収集団員3名同行記者団2名東京国際空港に集合
(秋庭記者は4月3日出発し、ハワイ経由にてグアム及び太平洋信託統治領を取材、グアムにて派遣団と合流)

02:30 パン・アメリカン819便にて関係者(ペリリュー島戦没者の遺族、戦友及びその他)の見送りをうけ東京国際空港発。

06:25 (グアム時刻とし、東京時刻+1時間)グアム着
秋庭記者、エドワード筒井、カルボ神父、グアム政庁トーマス知事秘書などの出迎えをうける。

グアム国際空港は、アメリカの海軍の飛行場を使用しており島の中央部にある。

07:30 グアム政庁の自動車にて収集団員3名はグアム、メモリアル、ホスピタル所属官舎 (Guam government

House) No. 14に入る。同行記者団はマイクロ
ネシア、ホテルへ。

11:00 信託統治領連絡事務所 (Liaison Office
of the Trust Territory the Pacific Islands)
に連絡官フィンドレー (L. G. Findley) を訪問し
て信託統治領入域申請手続をとる。

12:00 グアム政庁知事官舎にゲレロ知事を訪問し、来島
の挨拶及びグアムにおける遺骨調査について依頼し、同知事グ
アム議会議長などと昼食を共にする。

13:00~17:00 エドワード筒井の案内によりジゴの
南太平洋戦没者慰霊協会の記念碑建立予定地に到りマタギ山附
近の戦跡を視察し戦没者を弔い、次いでデデのジュニア・ハ
イ・スクールにストーバー (William B. Stover,
海上自衛隊より通知のフーバー氏は誤りでストーバー氏であつ
た。) を訪問し、グアム島における遺骨について質問するも要
領を得ず明17日の再会を約して別れる。

17:00~18:00 食料品を購入しグアム滞在間の自炊
生活の準備をする。

5月17日(水) 晴

10:00 信託統治領連絡事務所を訪れてパラオ地区の入域
許可をうけ、トラスト・テリトリ航空の搭乗券の購入及び搭
乗の確認を行なう。

順調に進む。

11:00~16:00 グアム島を一周する。行程約50マ
イルにて主として見学したところは次のとおり。

-6-

アガナーラツテ公園(ラツテとは石柱で、グアムの先住民の遺
跡から出る)及び防空壕(日本軍が掘つたもので、その後補
修して今も防空壕 (fallout sholts))と
して利用されており、グアムがベトナム爆撃の基地となつて
ある現在万一に備えていることが窺われる。)

アガトー米軍上陸地点及び当時の戦闘司令所跡。

ウマタツクーノ52ノマジェランの上陸地点及びスペイン時代
の要塞跡。

イナラジャンーカトリック教会(日本兵に殺されたシスターの
記念碑)及びスペイン時代の鐘楼。

アンダーソン基地一昨め許可をうけていなかったので入口から
帰る。

デデドー現に建築中の住宅及び軍用犬の墓 (War Dog
Cemetery) 。

17:00~18:00 コロール行の食糧品等の購入。

20:00 宿舎に藤谷四郎及びストーバー氏の訪問を受けグ
アムにおける遺骨収集について打合せする。その要旨次のとお
り。

1 グアムにはマタギ山附近(日本軍の最後の陣地)及びア
ガト(米軍上陸地点)に相当の日本人戦没者の遺骨がある
こと。

2 ストーバーは、もと米軍少佐で戦車隊の隊長としてベリ
リユー及びグアムの戦闘に参加し、現在アメリカ空軍基地
のボーイスカウトの隊長をしているので

(1) 許可があればベリリユーへ行き日本政府の遺骨収集に

-7-

協力すること。

(2) ボーイスカウトを使用してグアムにおける遺骨収集を実施しておくこと。

の申し出があり(2)について依頼する旨を答える。

5月18日(木) 晴

10:45 宿舎発(グアム政庁の自動車による。)

11:00 グアム空港着。

12:00 トラスト・テリトリー航空200便にてコロールに向い出発予定のところ、海軍機が滑走路に胴体着陸したため出発不能となる。

サイパン訪問を終つてグアム空港に着いた参議院議員の土屋代議士及び運輸省航空局の柳井課長と会いサイパンの状況を聞く。

13:00 グアム空港発。

15:30 ヤップ空港着(NHK三谷記者ヤップを取材中。)空港の傍に零戦の残骸あり。空港とは名のみにてニツパ・ハウスの待合所とトタン葺の入城検査所とがあるのみにて主として燃料補給。

16:30 ヤップ空港発。

16:50 (パラオ時刻とし、東京時刻と同じ。グアム時刻-1時間)パラオ空港着。パラオ空港はパラオ本島にあり。これ亦空港とは名のみにてトレーラー・バスの車体を利用した待合所があるのみのもの。

空港よりバスにてコロール水道を渡船により渡つて、コロールの町のもとパラオ公園の中にあるローヤル・パラオ・ホテル

(Royal Palau Hotel)に入り宿泊。

- 8 -

パラオ支庁の副支庁長ヤノ・タケオの出迎えをうける。

注

1 太平洋諸島信託統治領は次の6地区に区分して統治されている。

マリアナ地区-----マリアナ群島

マーシャル地区-----マーシャル群島

パラオ 地区-----カロリン群島のパラオ諸島

ヤップ 地区----- " のヤップ諸島

トラック地区----- " のトラック諸島

ポナペ 地区----- " のポナペ諸島

ハイコミッショナーのノーウッド(W. R. Norwood)はサイパンにいる。

各地区には支庁があり支庁長(District Administrator)がおり、いづれもアメリカ人で副支庁長以下には現地人を使っている。

トラスト・テリトリーの旗は青地に白い星6個(6地区を表わす。)を丸く配置したもので、この旗とアメリカ国旗と国際連合旗とを同じ高さに掲げることになっている。

2 ヤノ・タケオ氏は神奈川県桑野市出身の日本人農林技師を父とし、パラオ酋長の娘を母としてコロールに生れた日系2世で、横浜の中学校に学び現在パラオ支庁の副支庁長(総務担当)(Assistant District Administrator)であつて今次ペリリユー遺骨収集の準備から実施まで全般について世話してくれた人である。

5月19日(金) 晴

- 9 -

本日スコール3回あり雨期近しを思わせるものあり遺骨収集の時期がやや遅れたように思う。

08:00 バラオ支庁にマッケンジー支庁長 (J. B. Mackenzie, District ^{Adminis-} ^{trator}) を訪ね来島の挨拶を述べ遺骨収集についての協力を要請する。

バラオ支庁長より次のとおり注意及び要請があつて、研究のうえ要請に応ずることとし、ベリリユー島遺骨収集期間を前後各1日づつ短縮する。

1 遺骨収集にあたつては、不発の弾丸及び爆薬が相当あるので十分注意すること。

2 5月31日にハイ・コミッショナーがコロールに来るので30日にはベリリユーからコロールに帰り挨拶するようにされたいこと。(信託統治領に入るものはいづれも先づサイパンに行つてハイ・コミッショナーに挨拶するのが通例でパン・アメリカンの招待客でも皆そうしているとのことであつた。)

3 明20日バラオ支庁長として日本政府職員及び同行記者団を招待することになっているので出席されたいこと。

08:30~11:40 コロール島内を見学する。主なところは次のとおり。

バラオ公園——御大典記念の「バラオ公園」のコンクリート柱、昭和3年「高松宮殿下御手植王名(ヤシ)」のコンクリート柱などが残っているが、現在公園とはいわれない状況である。

日本人墓地——開拓殉難者の碑及び最近バラオ。サクラ会(日系人の会の名称)で建設した日本人死没者の碑などあり。

- 10 -

バラオ博物館

南洋神社——石灯籠のみが残っている。

旧南洋庁跡——何も残っていない。

旧バラオ支庁——残存しており現在裁判所になつている。一角にハワイ銀行があり事業費のトラベラー・チェックを交換する。

魚市場及びコロール港等——ヤップ・アイランダーズという300屯位の舟が入港しておりこの船がヤップ地区の島の連絡船で時にコロールへ来ることがあると聞く。

旧日本海軍の基地及び水上機発着場

15:30~18:00 ベリリユー島における遺骨収集に必要な器材及び食糧品を購入する。

5月20日(土) 晴 (夜スコールあり)

終日バラオ支庁長の招待にて南洋松島(バラオ松島とも言い、コロール島とベリリユー島との中間の海面に散在する大小各種の無人島をいう。島の数は約1200あるという。)を見学し観光施設のある島(砂浜があり、昔のバラオの住民を模した宿泊休憩施設がある程度のもの)で、バラオ料理のご馳走になる。海は、バラオ環礁の中であるので、非常に静かで澄みきつておるが東西の水道(環礁の船舶の通路)は波が相当に荒い。

主として見学したものは次のとおり。

1 旧海軍のコロール要塞の砲台及び燃料庫(いづれも爆撃により破壊されてそのまま錆びている。)

2 旧南洋真珠の養殖場跡

3 旧南洋開発の燐礫石採取場跡

- 11 -

4 ヤップにおいて使用されていた石貨の採取場跡

5 ベツ甲亀が卵を産みに来る砂浜

本日ペリリユー島に向け遺骨収集用荷物を定期便にて発送する。

5月21日(日) 晴

10:30 宿舎ローヤル・ホテル発コロールよりペリリユー島に向う。

11:30 コロールのポート・ハーバー発スピード・ポート

3隻に分乗出発

オ1隻(エンジン1個) 西村課長

オ2隻(エンジン2個) 松井、相川事務官、ヤノ副支庁長

オ3隻(") 記者3名

13:30 オ1隻ペリリユー島北埠頭に到着。オバック・クロールバック酋長(Obak Kloulubak, Chief) サプロウ・ギルブライ村長(Saburo Ngirablai, Elected Magistrate) 及びオサム運転手の出迎えを受ける。サプロウ村長及びオサム運転手はいづれも日系2世で日本語が良くわかり、特にサプロウ村長の日本語は丁寧で美しい言葉であつた。

戦後のペリリユー島の状況を開き、遺骨収集についての打合せを埠頭の樹蔭にて実施する。

次いでペリリユー村役場(埠頭より約500メートル)に到り村の集会(村の各家の代表者の集りで男女各40名計80名の集りである。ペリリユーの人口は750名で戸数は97戸という。)に出席して村民に紹介される。

15:30 オ2、オ3便もペリリユー島北埠頭に到着し、村

の集会場に到り村民に紹介される。

16:30 より、ペリリユー小学校の先生の官舎の一軒を借り、宿泊の準備。ペリリユー島には水道がなく、井戸は5個あるが溜り水であり、主として天水を利用している。また電灯はなく、一部はランプ、大部は魚油を燃して灯火としている。遺骨収集団の宿舎においても天水とし、灯火はコロールより携行した石油ランプ2個を利用した。

5月22日(月) 晴

07:30 宿舎前にてサプロウ村長立会の下に現地作業員等集合し打合せを実施する。

現地作業員で常時作業に出る者の氏名は次のとおりである。

作業員	エラガシル(63才)	もと日本海軍軍属
	エラリゲル(56才)	もと南洋庁巡査
	エリヤン(39才)	
	ダエルバイ(37才)	
	ケイイチ(27才)	日系2世
	ススム(25才)	"
運転手	オサム(40才)	"

08:00~11:30 自動車にて中部丘陵地帯に到る。

中山西側斜面自然壕などより 30柱

水府山東側自然壕より 70柱

を収集し旧日本海軍司令部跡の仮安置所に安置する。爾後いづれも収集した遺骨は同様に処理することとする。

水府山は現地名イルル丘といい本日実施した自然壕は戦前壕内に湧水があつたが現在は埋没しており、現地人の伝説によると

- 13 -

「昔この洞窟には鬼女が住んでおり人を取つて喰つたがペリリユーの村の勇者が全身に刺を立てて鬼女のところへ行き遂にこの鬼女を退治し、それからペリリユーは平和で静かな村になった。」ということである。

洞窟はいづれもアメリカ軍によつて火焰放射器で焼かれたように黒く焦げた跡が今も残っている。

13:30~17:00 自動車にて西南部海岸アメリカ軍の上陸地点オレンヂ・ビーチの調査及び遺骨の収集 50柱
オレンヂ・ビーチは幅20メートル位の砂浜が1,500メートル程続いており、南洋松その他の木のジャングルがあり、この地点に敵の上陸を予期した日本軍が水中に障害物を設置し、海岸に火網を構成するよう多数の機関銃及び速射砲のトーチカを設けていたものと判断され遺骨はそのトーチカで収集した。海浜及び海中を調査したが遺骨は全く見つからなかつた。

この間飛行場跡、ペリリユー島南埠頭（アンガウルへ行くとき利用する。）及びアメリカ軍の宿舎、弾薬庫の跡などを見る。何れも倒れておつて屑鉄の散乱が甚しい。

太い鉄線の巻いたものの中に20センチメートルを超える木のびておりあれから23年の歳月を思はせる。

本日の収集せる遺骨 計 150柱

5月23日（火） 晴

08:00~11:30 } 北部丘陵地帯の北山北側の地下壕の
13:30~17:30 }
遺骨を収集する。 750柱

北山は現地名アカロコル山といい。この地下壕は全長2000

-14-

メートルに及ぶもので、ドイツが統治していた時代に燐礫石を採取するため造つたものを、旧日本海軍にて改造し戦時中は物資の集積所に、次いで患者の収容所に使用されていたようである。壕の中は比較的乾燥しており、戦後アメリカ軍はこの洞窟の入口をブルドーザーで閉鎖したが、その後現地人が真鍮採取のため入口をあけて出入したものと判断される。

この間に大山山頂のアメリカオ81師団の記念碑を見る。よくもこの急峻なところに建碑したものだと感心する。

本日収集せる遺骨 計 750柱
累計 900柱

5月24日（水） 晴

本日同行記者団は記事を送るためヤノ副支庁長とともにコロールに向う。

08:00~11:30 中部丘陵地帯に到り

天山西側自然壕より 20柱

東山東側自然壕より 70柱

を収集する。

13:30~17:30 午前と同じく中部丘陵地帯に到り

大山東側自然壕数個より 90柱

大山東側自然壕の東側に池あり燐礫石の採掘した穴に水が溜つたもので、日本軍の水の補給源であつたとのことである。

更に北部丘陵地帯機関銃座より 20柱
を収集する。

本日収集せる遺骨 計 200柱
累計 1,100柱

-15-

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0015

5月25日(木) 晴 (夜スコールあり)

08:00~12:00 自動車にて島の中央部に到り中部丘陵地帯及び西岬附近海岸地帯を調査して

西岬附近機関銃座等より 10柱

天山、中山大自然壕等より 20柱

観測山南方自然壕等より 10柱

天山、中山大自然壕は鑑乳洞で丘陵の下部に入口があり、全長約120メートルで丘陵を西から東へ抜けておりペリリュー島中央部の丘陵の幅を示す。東側入口附近の分岐壕には「こうもり(小型)が多数棲息してゐる。西側入口附近は壕が2階になつており2階の防空壕といわれたものはこの壕と推定される。壕の中央部の壁に「昭和十八年七月十五日島袋当真」と墨書してあつた。

14:00~17:00 西岬附近の陣地を広範囲に亘つて調査搜索してトーチカ等より 40柱

本日収集せる遺骨 計 80柱

累計1180柱

5月26日(金) 晴 (昼間スコールあり)

08:00~11:00 本日午前をもつてペリリュー島南部を終了することとして調査を完了する。

ペリリュー島南端自然壕等より 10柱

オレンジ・ビーチ陣地より 20柱

13:00~15:00 この間中部丘陵地帯を終了することとして調査を完了する。

15:00~18:30 この間北部地区を終了することとし

-16-

て調査をする。

北部丘陵南側洞窟等より 10柱

同 中部自然壕より 80柱

本日収集せる遺骨 計 120柱

累計1300柱

5月27日(土) 晴

本日11:00頃ヤノ副支庁長及び同行記者団コロールより帰還する。

08:00~12:00 この間北部地区全般を調査してペリリュー島全島の遺骨収集を完了する。

この間北部丘陵中部自然壕より次のとおり遺品を収集する。

就業確認証明書(パラオ兵站部発行のもので秋山の捺印あり)

水晶の印かん(れい番にて村上と読みとれるもの)

革の破片(三木と墨書してある)

オ一次行賞賜物件交付授受簿(オ3中隊のもの)

需要伝票

拡大鏡

飯ごう(姓が影りこんであるが判読不能)

到るところに鉄帽、防毒面、小銃、銃剣、手榴弾、小銃弾、各種銃砲弾兵器、薬物等あるもいづれも姓名がなく収集しなかつた。

14:00~17:00 この間記者団を案内して、旧海軍司令部跡の収集した1300柱の遺骨を拝礼、旧海軍通信部跡南埠頭等を調査するも全く遺骨は発見できなかつた。

また、中川大佐戦死の地の記念碑は水府山東側にあつたとの情

-17-

報により現地人の案内により調査したが遂に見当らず。この中川大佐の記念碑は空の酸素ボンベを利用したもので2年前酸素ボンベの回収が行なわれたときに撤去されたものとの結論に達した。

本日サプロウ村長より次のとおり戦没者遺骨の火葬等について申入れがあつた。

村の長老会議の決定により村民墓地の西南角に80平方メートルの土地を提供するので同地において火葬し、残灰はその墓地に埋葬されたい。また、その墓地に記念碑を建てては如何。

その理由は

- 1 貨殿からの申入れは火葬の場所として旧海軍司令部跡または飛行場跡を指定されたが、旧海軍司令部跡は台風等の非常の際村民の避難場所であり、飛行場跡も道路及び飛行場として近く改修の予定で同意いたしかねる。
- 2 村民墓地が火葬場として適当であるので村の長老会議が決定した。
- 3 日本人はキリスト信者は少いのに「戦没日本人の碑」が教会然もカトリックとプロテスタントの教会の間にあるのはおかしいので、あの碑を墓地へ移すのがよいと考える。
- 4 村民墓地ならば毎年12月の清掃の際に一般村民の墓を同様に清掃ができるが、キリスト教会はまだ復旧もしておらないので村として責任が持てない。

よつて火葬の場所については村長の意見に同意し、碑の移転に関しては日本に帰国後回答することとした。

火葬地点等の配置要図別紙才3のとおりである。

- 18 -

5月28日(日) 晴 (夜相当激しいスコールあり)

08:00~12:30 村民墓地南側地区において火葬用の薪を収集する。(トラック3台分)

14:00~16:00 旧海軍司令部跡より収集した遺骨

1,300柱(トラック2台分)を村民墓地内火葬地に運ぶ。

火葬用薪を高さ60センチメートル幅3メートル長さ7メートル

に積みその上に遺骨をならべ、また、その上に薪を積む。夜

間降雨を考えその上をシートにておおつて帰る。

本日相川事務官及び同行記者団はアンガウル視察を予定したが潮の関係で日にて往復することができず中止する。

天水桶の水が底をつきシャワー便所の使用を制限することとなつたが夜のスコールにすくわれる。

5月29日(月) 曇 (小雨あり)

08:00 村民墓地に集合

09:00 ヤノ・バラオ副支庁長、オバツク酋長、サプロウ村長及びベリリユー村の長老などの参列を得て火葬開始、火葬の火がジャングルの緑に映えて美しい。

12:00 スコールあり、火葬も相当進んだのでトタン板でおおつて雨をさける。この雨について次のような感想が出た。

1 ベリリユーの戦斗は雨季に行なわれたのに、殆んど雨が降らず将兵は水不足に苦んだので今、天が末期の水を捧げているのだ。

2 ベリリユー島戦没1万の将兵の霊が遺骨とともに祖国日本へ帰ることができる嬉し涙である。

3 ベリリユー島戦没者の遺族の悲しみの涙である。

- 19 -

おそらくそのいづれでもあらうと思われる。

15:00~16:00 まで納骨。当初布袋を使用したが生かしが入らないので直接30センチメートル立方の段ボールの箱に納める。

残灰は墓地に1立方メートルの穴を掘り埋める。この小さな穴を掘るときに3個の砲弾の破片が出てくるのを見て、如何に多くの弾がアメリカ軍によつてこの島に撃ちこまれたかを思う。残灰を埋めた跡に長さ2メートル、1.5センチメートル角の鉄木の標柱を立てる。この標柱は祖国日本に向うように北面して建て表面には「日本人戦没者の霊」裏面には「昭和四十二年五月建之」と書き、後日現地人にその文字を彫りこんで墨を入れてもらうこととした。

17:00 より「戦没日本人の碑」に設けた祭壇の前にてベリリユー島戦没者の追悼式を実施する。

式の次序は次のとおりである。

開式の辞

黙とう（1分間）

追悼の辞 西村収集団長（内容別紙オ4）

献花 西村収集団長及び信託統治領を代表してヤノ・パラオ副支庁長

献香 参列者全員

閉式の辞

司会者 松井事務官

式の終る頃は長い南国の日も落ちて祭壇に飾つた火焰樹（現地人は南洋ざくらと呼んでいる。）の赤と遺骨箱の白とが背景

- 20 -

の緑とともに何んとも言えない荘厳さをかもししていた。

遺族戦友等から託された写真手紙等はこれを祭壇に供え式終了後碑の背後に掘つた穴に埋め戦没者の冥福を祈るとともに遺族が永遠に平和な生活を送れるように祈念した。供物のうち食料品等は現地人に分配して遺族の気持をつたえた。

特に印象的であつたのは作業員その他日系2世が静かに黙とうを捧げてくれたこと及び線香をあげていつまでも碑の前にうづくまつていた姿である。

19:30 より村役場の会議室において酋長、村長及び長老等ベリリユー村の要人と会食をする。

オバック酋長は収集団の労苦をねぎらい、戦没者の冥福を祈りかつ遺族に安心するように伝えてくれと挨拶し、遺族がこの島へ来ることがあつたら予め連絡してくれば便宜をはかることを約した。

これに対し西村遺骨収集団代表は別紙オ5のとおり挨拶をした。料理はベリリユーの産物で造つたベリリユー料理であつた。

5月30日（火） 晴

早朝より宿舎を整理し、酋長、村長及び現地作業員に別れの挨拶をする。

11:45 ベリリユー北埠頭発ベリリユー島民の見送りをうけて、青い海に白い航跡を残して進む快速艇（時速30哩）より緑のベリリユーの島を望みながら「ベリリユーよ永遠に静かなれ」と祈りつつ。

13:00 コロール着ローヤル・パラオ・ホテルに泊る。

収集団員も同行記者団も疲労甚しく早目に就寝。

- 21 -

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0018

5月31日(水) 終日風雨

終日激しい風雨で、もしベリリユーから帰るのが今日であつたら大変なことだ。或いはコロールへ帰れなかつたかも知れないと思ひ、英霊の加護であつたと思う。

12:00 ハイ・コミッショナー、ノーウッドがホテルの視察に来たので挨拶する。

1 コロールの台風被害に対する見舞。

2 ベリリユー島日本人戦没者の遺骨収集についてのお礼。

3 来年1月日本政府はマリアナ地区のサイパン及びテニアンならびにヤップ地区のオレアイ(メレヨン)の遺骨収集を計画しているのでよろしく頼む。

これに対し、ハイ・コミッショナーはベリリユー島の日本人戦没者の遺骨収集が成功して良かったと挨拶をかえした。

16:00 ヤノ副支庁長、昨日コロールへ帰つてから発熱の由を聞き自宅に見舞う。

6月1日(水) 雨

終日休憩

18:00 より明日のトラスト・テリトリー航空の搭乗手続及び荷物の託送。

19:00 よりパラオ・ハイ・スクールとボゲイショナル・スクールの卒業式に招待をうけて出席、アメリカ式の南国の花を飾つた華麗な卒業式であつた。

21:00 よりパラオ支庁長マツケンジー氏の招宴に出席。

6月2日(木) 曇後雨

05:00 起床

- 22 -

07:15 トラスト・テリトリー航空201便にてコロール空港発

09:45 ヤップ空港着

10:15 ヤップ空港発

13:00 グアム国際空港着

グアム政庁の自動車にてグアム・メモリアル・ホスピタル官舎14号に到りシロウ・フジタニとグアムにおける遺骨収集についての打合せを実施する。

6月3日(土) 晴

09:00 宿舎発ジゴのストーパー宅に到り同氏のジープにてマタギ山附近の戦跡を調査し、防空壕より遺骨2柱を収集する。

13:00~17:00 アガナの旧日本軍の防空壕を見学し、アガットの戦跡を調査しストーパー氏製作のグアム戦跡記録映画を見る。

グリンプス・オブ・グアム(*Glimpses of Guam*)のストーパーの記事別紙才6のとおりである。

6月4日(日) 晴

午前中遺骨の整理

14:00 よりエドワード・筒井の案内にてアガナのアメリカ海軍基地内の戦没日本人の碑に参拝し、同基地内の海軍専用のガブガブ海水浴場(*Gabgab Beach*)及び日本軍の魚雷艇を見学する。戦没日本人の碑も海軍基地内にあるため簡単ではあるが手続が必要であるので一般の参拝が不便であるのと軍人軍属の宿舎が拡張されてその附近まで宿舎が建ち今や

- 23 -

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0019

この位置は適当でなくなっている。

次いでアンダーソン基地（アメリカのベトナム爆撃の基地を見学する。空軍専用のトラグ海水浴場（*Trague Beach*）及びその宿舍群の広大さに驚く。

夜、ヨシコ・イワシタ夫人の招待をうく。

6月5日（月） 雨

11:00 よりグアム政庁に到りゲレロ知事にお礼とお別れの挨拶をする。

11:30 グアムR, C, A より厚生省に国際電話し、遺骨及び遺品の状況を報告し羽田到着時の行事について打合せ。

シロウ・フジタニよりご馳走になる。

夜、雨期に入つたため蚊が出る。

6月6日（火） 晴

04:15 宿舍発 *がく島知事科書*

05:45 パン・アメリカン828便にてグアム国際空港発、

シロウ・フジタニ及びエドワード・筒井等の見送りを受く。

08:15 東京国際空港着、タラップにおいて遺骨を援護局長に渡す。遺族及び戦友等の出迎えをうく。

次いで記者会見して、ペリリュー島等の遺骨収集の概要を説明する。

オ4 所 見

1. パラオの観光案内図 *Daniell's map of Palau* のペリリュー紹介は次のとおりである。

Bloody-nose Ridge Peleliu

Site of a great battle where the Japanese lost 11,000 men. The ridge is full of caves many were sealed with men still in them. 1945.

ペリリューの血の丘陵

過ぐる大戦において日本人11,000名が戦没したところである。丘陵には洞窟が多くあり、その洞窟の中には多くの戦没者かとじこめられている。 昭和20年

ペリリューの戦斗終了後アメリカ軍は、日本戦没者の多数あつた洞窟（壕）の入口をブルトザーで閉塞した土が年月を経て自然に崩れ、また真鍮ブームで現地人が小さく入口を開きその状態が一般の目にふれるようになったものと推定される。

よつてアメリカ軍が閉塞しなかつた壕は殆んど昭和28年の遺骨収集の際収集されたもののようで今次の遺骨収集はその後開口した壕及び入口が発見されなかつた壕等から多くが収集されたものである。

今や真鍮ブームのため総ての壕が開口していると推定され、今次遺骨収集をもつて完了としてよいものと判定する。

2 アメリカ軍はペリリユー島の西南オレンヂ・ビーチに上陸して逐次日本軍を圧迫して、中部丘陵水府山附近に圧迫して遂に玉碎に到らしめた戦況より、オレンヂ・ビーチ及び中部丘陵地区を当初主として調査したがこれらの地区からは遺骨を収集することができなかつた。これはこの地区は平坦地及び開放された壕が多かつたことにより遺骨が風化し、或いは昭和28年に収集されたように思われる。

北部丘陵地帯は戦斗初期の負傷者を壕内に収容したように思われ、アメリカ軍の火焰放射器の攻撃により戦没したものが多く、戦後壕の入口を閉塞したため遺骨が本日まで残存していたように思われる。

遺骨の主な収集地点を図示すれば別紙オ7のとおりである。

3 ペリリユー島は戦斗及び台風のため丸裸になつたとのことであるが、南洋の気候はジャングルを旧に復して今や他の島と遠望は変わりなく、現地人の住居の貧弱なこと、椰子のないこと、多数の屑鉄が散乱していることなどに台風及び戦斗の痕跡が認められる。特に多量の屑鉄（弾丸その他の鉄材）が陰惨の感を深くするが、これは現在いたし方のないことである。

4 遺骨収集の成果を挙げるためには、現地に適当な協力者をうることが必要である。今次の遺骨収集が成功したのは、ヤノ・バラオ副支庁長と連絡がとれたことがオ一の原因であり、その指示により適当な作業員が得られたことがオ二の原因である。ヤノ副支庁長は日系2世であること、現に要職にあることにより、計画準備及び実施に方り細心の注意を払われたこと及び私財を投じて協力されたことは特筆大書しなければならない。

- 26 -

現地作業員がいづれも地形に通曉しており、洞窟の所在について詳知しており、いづれも体力充実し老若の取り合せも適切で日系2世で日本語を解するもの等であつたことも良かった。これはヤノ副支庁長の指示が適確であつたことにもよるが直接選定にあたつたオバック酋長及びサブロウ村長の適切な処理によるものと思われる。

遺骨収集にあたり戦況を判断し、生存者の言うことを良く聞くことは、もとより主要なことであるが南方の高温多湿と23年の歳月を経過していることを十分考慮することが必要である。

5 ペリリユー島で収集した遺骨はいづれも氏名を判定することができないので遺族に記念に貝を集めることとした。ペリリユー島民はこのことを聞いて老いも若きも、男も女も、挙げてこれに協力してくれ、美しい貝を集めてくれた。

当初土か、砂かとの話も出たが、植物検疫上好ましくない旨を伝えたと椰子の虫害になやまされた体験を持つ島民は直ちにこれを了解してくれた。

6 グラム島の遺骨に関する情報はあまり適確のものではなかつたので成果はあがらなかつた。ある所（アガト附近）にアメリカ軍が日本人戦没者の遺体を集めてブルトラーザーを利用して埋没したとの風評があつたがこれ亦適確ではなかつた。

7 遺骨収集を終つてグラム島の宿舎に安置する。この宿舎の上空を毎日数十機のB52爆撃機がベトナムに向う。また、6月6日朝のパン・アメリカン機の中で中東の紛争の発生を聞く。何とも複雑な気持であつた。

8 6月6日07:45頃パン・アメリカン機の左の窓に富士山

- 27 -

頂を望み、遺骨に祖国日本へ帰つたことを告げ、その冥福を祈る。

次いで機は厚い雲とスモッグを突いて空港に着陸、遺族、戦友及び関係者に迎えられて、ペリリュー島の日本人戦没者遺骨収集の完了を報告し、重ねて戦没者の冥福を祈る。

別紙オ /

ベリリユー島遺骨収集資料

1 ベリリユー島の概観

(1) ベリリユー島は日本の委任統治領であつたが、戦後米国の信託統治領となり今日に至つてゐる。

(2) ベリリユー島は北緯7°、東経134°に位置し、パラオ諸島コロール島の南約40軒にあり、延長約9軒、幅約2軒で、全島珊瑚礁の隆起により形成された石灰岩の島である。

中央部は、縦に長く標高30米位の台地となつており、その地形は極めて複雑でいたるところに断がいがあるが、南部は極めて平坦地である。海岸線は北部、東部、南部は一般に砂浜で、西部には3~4米の断がいがところどころに連なつてゐる。

(3) パラオ諸島は、日本本土防衛の一環として南方地域作戦の進展に伴ない先ず海軍部隊によつて航空基地を建設中であつたが、ソロモン群島、東部ニューギニア戦線の急

- 30 -

迫に伴ない昭和19年3月オ14師団が満洲より転用されてその一部がベリリユー島に上陸、同島の警備並びに作戦準備に着手した。

2 ベリリユー島の戦闘

(1) 配置部隊

ア 陸軍部隊

歩兵オ2連隊	3,588名
歩兵オ15連隊オ2大隊	2,354名
同 オ3大隊	
独立歩兵オ346大隊	556名
特設オ33機関砲隊	85名
特設オ35機関砲隊	85名
特設オ38機関砲隊	86名
オ14師団戦車隊の一部	122名
オ14師団通信隊の一部	39名
オ14師団経理勤務隊の一部	46名
オ14師団野戦病院オ一分院	117名
オ23野戦防疫給水部の一部	37名
オ3船舶輸送司令部パラオ支部の一部	11名

- 31 -

海上機動オ/旅団輸送隊の一部 86名
計 7212名

イ 海軍部隊

オ45警備隊の一部 700名
西カロリン海軍航空隊の一部 370名
オ76/海軍航空隊の一部 300名
オ2/4設営隊 800名
横須賀海軍施設部派遣員 500名
芝罘海軍補給部派遣員 200名
その他 530名
計 3400名

陸海軍合計 10612名

(2) 防禦陣地の構築状況

ペリリュー島守備部隊は米軍の上陸地点を南部飛行場地区と判断し、この方面に対して主防禦陣地を構築した。主防禦陣地は二線としオ一線陣地は縦深に構築され、砲兵陣地などは山をくり抜き砲身のみを出し艦砲射撃並びに爆撃に抗しうるよう設備し、海岸の砂浜には一条乃至二条の対戦車壕を掘り、これに連携して対戦車砲陣地をも構

築した。

オ二線陣地は砲爆撃の集中により逐次崩壊されることを予想し、又持久戦をも考慮して棲息、軍需品の貯蔵をかねたものとし横壕に対しても射撃設備をなし、トーチカ式の陣地を構築してあらかじめ糧食を分散貯蔵しておいた。

又、予備隊はジャングルを切り開き断がい間に架橋して数条の返撃路を開設した。

(3) 戦闘状況

ア 歩兵オ2連隊

連隊は水府山を中山に南地区を除く全島に亘つて配備し、昭和19年9月15日08:00頃から正午頃迄の間に上陸せんとする米軍を数次に亘り水際に撃滅したが、ついに正午頃に至り米軍は戦車を先頭に上陸した。

部隊は直ちにこれを陣前に迎撃し

たが、逐次兵力を増強する米軍の攻撃で
才ノ大隊長市岡大尉、才2大隊長富岡少
佐以下多数の戦死者を出した。

戦闘は次才に才2線陣地に移行し、水
府山陣地及び天山陣地に拠り、連日連夜
将兵一致団結、よく奮戦敢闘しついに11
月24日全員玉砕した。

イ 歩兵才ノ5連隊才2大隊

米軍上陸後9月16日逆上陸部隊とし
てパラオ島から舟艇により出撃、夜陰に
乗じてペリリュー島に接近したが、途中
敵の発見するところとなり、海上におい
て相当の損害を受け一部はペリリュー島
北東岸から上陸を敢行し、水府山陣地に
到り、歩兵才2連隊長の指揮下に入り奮
戦したが遂に全員玉砕した。

(才6中隊の一部は途中からパラオ島に
復帰)

ウ 歩兵才ノ5連隊才3大隊

大隊は南部地区に位置し、海軍部隊と

連携して上陸した米軍の右側に対し
て多大の脅威を与えつつ勇戦奮闘し、
米軍に甚大な損害を与えたが、つい
に才ノ線陣地において大隊長以下大
部分戦死した。

エ 独立歩兵才346大隊

大隊は、北部地区においてあらか
じめ海軍部隊と緊密なる協同のもと
に構築した堅固な陣地に拠り勇戦奮
闘、その屍を陣前、陣内に累積し、
又数次に亘る斬込みにより多大の戦
果をあげたが、ついに力つき全員玉
砕した。

オ 特設才33機関砲隊

米艦上機来攻に対して勇躍射撃を
続行し、その都度之を撃退して多大
の損害を与えたが、米軍上陸後は北
山地区に移動するに及び独歩大隊と
ともに地上戦闘に協力し、壮烈なる
斬込みを決行して全員玉砕した。

カ 特設才35機関砲隊

飛行場北側、観測山付近に位置し、米軍機に対して果敢なる射撃を行ない、米軍上陸後は平射砲陣地に変換して、前進する米軍に猛射を浴びせて敢闘し、或いは、斬込み隊を編成して果敢なる突撃を行なった後、水府山地区に合流して歩兵才2連隊主力と運命をともにした。

キ 特設才38機関砲隊

飛行場東部付近に位置し戦闘初期、専ら対空射撃に任じたが、米軍が飛行場地区を北上するにあたり、側面から猛烈なる水平射撃をもつて多大の脅威と損害を与え、じ後歩兵才15連隊才3大隊に合流して奮戦力闘の上全員戦死した。

ク 才14師団戦車隊の一中隊

当初水府山麓凹地に位置し、米軍が飛行場西方海岸より上陸するや歩兵才2連隊の逆襲部隊と相呼応して出撃し、飛行場付近において米軍と遭遇、戦車数輦を

擱座させたが我が方も相当の損害を被つた。

次いで、勇躍敵陣に突入して米軍を蹂躪したが、ついに物量に抗し得ず我が戦車の行動が不能となつたため、残存者は水府山にいたり歩兵才2連隊主力と合し勇戦奮闘、ついに全員玉砕した。

ケ 才14師団通信隊の一部

歩兵才2連隊本部位置（水府山）に位置しもつばらパラオ島の師団司令部との連絡に任じ、11月24日最後の無電報告を行なうまで堅忍持久よくその任を全うし最後の斬込みに全員参加して玉砕した。

コ 才14師団経理勤務隊の一部

水府山陣地において歩兵才2連隊本部と行動をともにし全員玉砕した。

サ 海軍部隊

海軍部隊は、主力を飛行場及び観

測山付近に配置し、米軍の上陸とともに陸軍部隊に連携し、果敢な反撃作戦を展開し米軍に甚大な損害を与えたが、飛行場地区においてほとんど玉砕し、生存者は所在の陸軍部隊とともに敢闘した。またその一部はペリリュー島北地区北山に堅固な洞窟陣地を構築し、独立歩兵才346大隊とともに奮闘し、19年12月末玉砕した。

3 戦没者の状況

陸軍部隊総数7,212名中戦没者6,766名生還者446名、海軍部隊総数3,400名中戦没者3,390名生還者10名であるが部隊別戦没者は次のとおりである。

部 隊 名	総 数	戦没者	生還者
歩 兵 才 2 連 隊	3,588	3,306	282
歩兵才15連隊才2大隊	2,354	2,204	150
" 才3大隊			
独立歩兵才346大隊	556	554	2
特設才33機関砲隊	85	79	6
" 才35 "	85	83	2
" 才38 "	86	82	4
才14師団戦車隊(一部)	122	122	0
" 通信隊(一部)	39	39	0
" 経理勤務隊(一部)	46	46	0
" 野戦病院才一分院	117	117	0
才23野戦防疫給水部の一部	37	37	0
才3船舶輸送司令部才支部の一部	11	11	0
海上機動才1旅団輸送隊の一部	86	86	0
陸 軍 部 隊 計	7,212	6,766	446
才45警備隊(一部)	700	3,390	10
西カロリン海軍航空隊(一部)	370		
才761海軍航空隊(一部)	300		
才214設営隊	800		
横須賀海軍施設部派遣員	500		
芝浦海軍補給部派遣員	200		
そ の 他	530		
海 軍 部 隊 計	3,400	3,390	10
合 計	10,612	10,156	456

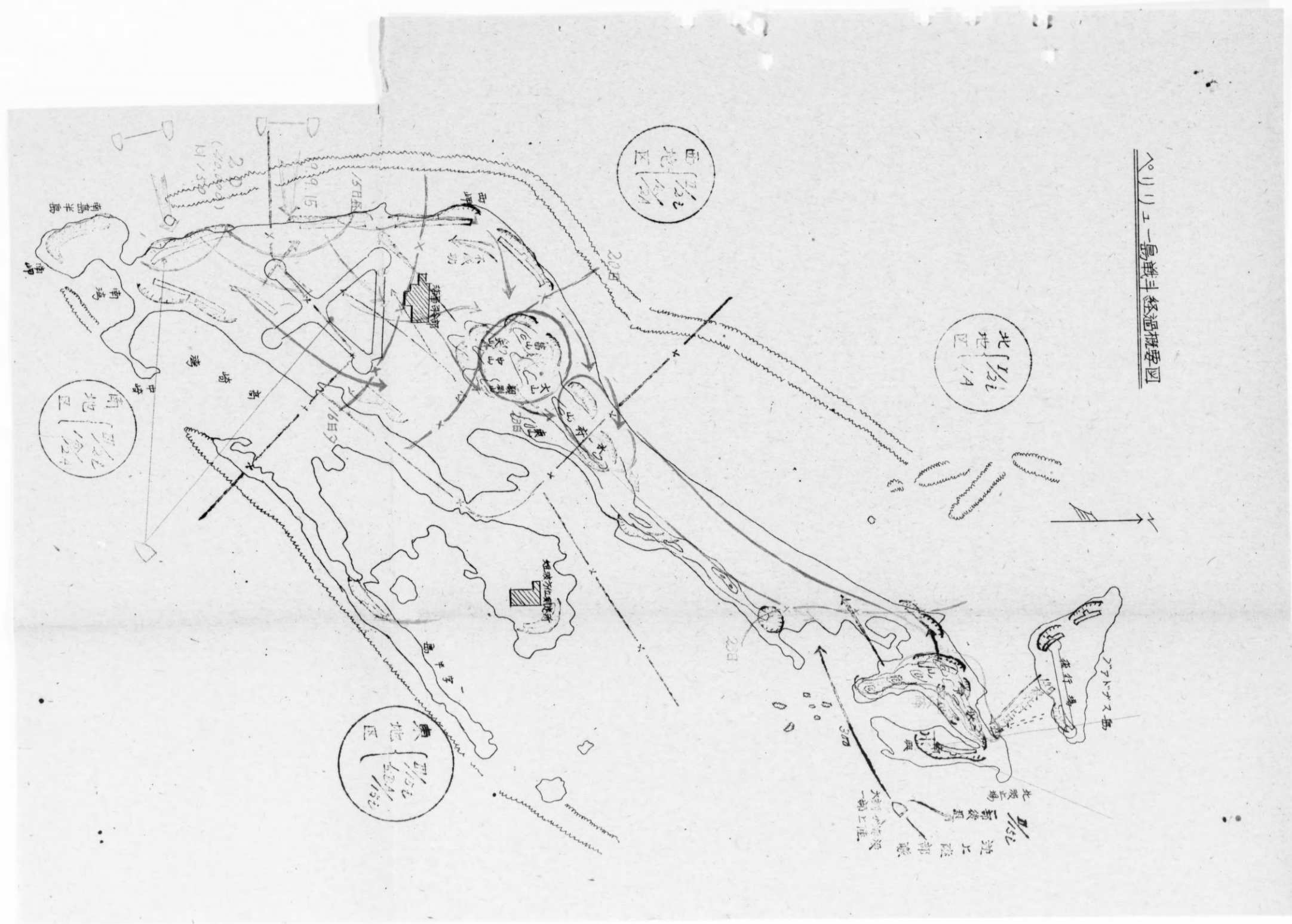
4 ベリリユー島における遺骨の収集等について

ベリリユー島戦没者の遺骨は156柱が収集され千島ヶ淵戦没者墓苑に埋葬されている。

上記の156柱の遺骨は、遺骨収集現地慰霊のため、米軍管理下の南方八島に派遣された政府派遣団により、昭和28年3月4日収集された151柱（同時に遺品18点が収集された。）および昭和40年8月28日に日本仏教文化協会が派遣した南太平洋戦没者慰霊団により、収集された5柱である。

付図

ベリリユー島作戦経過の概要



外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0029

ベリリユー島の現況

パラオ支庁編 " *This is Palau* " より

ベリリユーの村はコロール島の南方約30マイルのベリリユー島にある。この村には3つの部落があるがそのうち2つは極めて小さく、クロークルベットという部落だけが大きい。公立学校と村役場とはこの部落にある。公選の村長はサブロウ・ギルブライ、酋長はオバック・クロールバックである。

注：酋長は各部落の長老会議の決定による。村の実力者は酋長で、公選村長は連絡員のようなものである。

住民は島の北部に集まっており、島の南部には民家はない。しかし戦前にはベリリユーの主な部落は南部にあつた。今日では昔の村の集会所と見すてられた墓地とが当時の部落の面影を残している。

1964年11月の台風によつて、ベリリユーの総ての建物が破壊された。再建された建物をみると村は「ほつたて小屋の町」に見える。復興がはかどらないのは安定した収入がないからである。戦時中の屑鉄の回収（この屑鉄も殆んどなくなつた。）コロールへ魚や薪の販売及び他の島への建築労務者としての出稼ぎが村の乏しい収入源である。

日本の統治時代の古い道路やアメリカ海軍の統治時代の道路があつて、ベリリユーを端から端まで交通することができるが、石灰岩の丘陵地帯にはどつどつしておつてジャングルもあり、徒歩でも通過が困難である。終戦後、日本軍が何年も隠れていたのも

不思議ではない。

この古い道路は遠いたる芋畑や菜園へ行くのに便利であり、また、島の南端にある砂浜へ遊びに行くのに便利である。ピクニックや魚取りは若い者達の絶好のレジャーである。

ベリリユーの人口は現在750人で、そのうち186人は小学生である。台風によつて校舎がこわれ1年以上教育活動が狂い、応急の小屋で授業をしていたが1966年2月に新しい永久建築の校舎が完成した。父兄が正規の教育の必要を認識しているので生徒は一般に非常に熱心である。

住民は村の近代化に積極的である。4台のジープがあつて埠頭から村までの約半マイルをタクシーとして利用することができる。最近住民は街燈及び家庭用電力のため村の主な道路に電線を架設した。発電機はアメリカ海軍の発電設備を補修したものを利用している。住民はなかなか機械に詳しい。

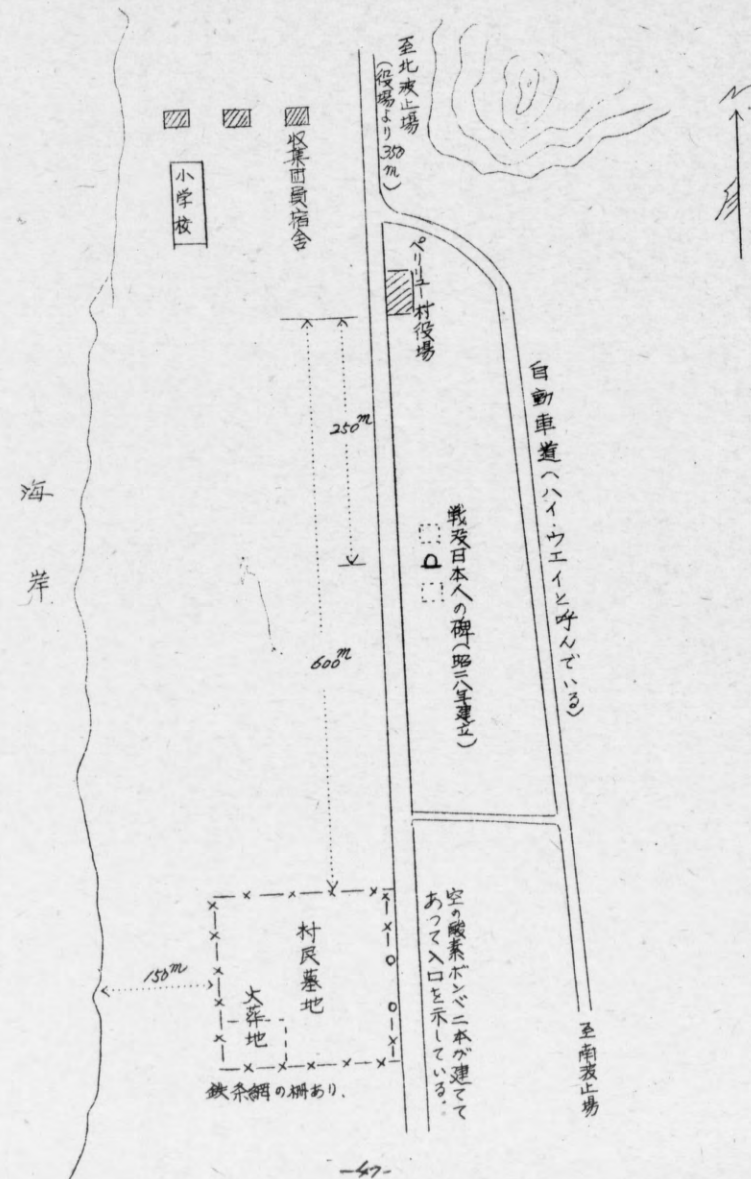
多くの村民は台風の時から他の島へ出稼ぎに行つて家族を養っている。その出稼ぎ先はヤップ、グアム及びハワイでベトナムまでも出かけている。そのため他の方面のニュースに強く関心をもっている。

アメリカの通貨は経済上の取引に重要度を増しているが古いパラオ通貨も決して価値を失つてはいない。

例えば家を買うときにはいくらかパラオの通貨をまぜなければ取引は成立しないし、また、逆にカヌーはパラオの通貨だけでも買えて、パラオの通貨が足りないときはこれに見合うアメリカの通貨で補つてよいことになつている。石貨は稀少価値と伝統的価値をもつているといえる。

火葬地等要図

別紙第3



ガドブス島には9000本の椰子園があつて、この椰子園はやがてベリリユー島の重要な財源となるだろう。ガドブス島はベリリユー島の北方約半マイルのところにあり、村有地である。椰子園はかぶと虫の虫害を受けないよう昆虫学者ロバート・オーエンの指導の下にその管理が行なわれている。

ベリリユー、ガドブス両島間の浅い礁湖は、誠に珍しいものである。一年のうちの数日間、干潮と強い陽光と静かな空気が一緒になつて水温があがり礁湖の魚が死ぬほどになる。

こんなとき住民は浅い水の中に入つてふらふらになつた大小各種の魚をバケツに一杯拾うことができる。こんな日にベリリユーを訪れる人はこの島を理想郷と思うに違いない。

別紙才々

追悼の辞

本日ここペリリュー島戦没日本人慰霊の碑の前にささやかな祭壇をしつらえ、この地に静かに眠つておられる皆様の御霊に謹んで申し上げます。

昭和28年3月、政府は戦没者のご遺骨の収集及び現地慰霊のために派遣団を太平洋上の諸島におくり、この島においても小碑を建立して御霊を慰め、一部のご遺骨を故国日本にお迎えしたのでありますが、当時は被占領体制終了後日なお浅く、諸般の制約の下で実施したため、このペリリュー島においても一部の象徴的なご遺骨を収め得たにすぎず、じ来ノ数年心ならずも徒らに歳月の経過を見た次才であります。このことは、ひたすら祖国の繁栄を念願して散華されました全島ノ万の御霊に対し、まことに申しわけなく、国民の齊しく心残りに存じていたところであります。このたび、私どもは日本国政府の代表として国民の切なる願いを実現するため再びこの地に到着し、くまなく全島の戦跡を踏査して皆様のご遺骨をもとめ、遅ればせながら故国にお迎えする機会を得ましたことは、真に喜びにたえないとともに、生き残つた私達同胞として責任の一部を果しえたような安心感を覚えるものであります。

かえりみれば故国はるかな太平洋上の孤島に、絶対優勢の敵をよう撃して激闘70日の間、鬼神の奮戦を続けられ玉碎されましたから既に20有余年激戦の丘陵、死闘の洞窟も今は密生繁茂するジャングルの中に静かに眠っています。このジャングルの中に

- 48 -

散在するご遺骨や、狭隘暗黒の洞窟内に折重なる多くのご遺骨に接し鬼気身に迫るを覚え、当時の熾烈な、戦闘の凄惨な光景が彷彿として想起され、感慨一入新たなものがありました。

祖国日本は終戦以来皆様のご加護と国民の精進努力により、幾多の苦難をのり越え順調な発展をとげてまいり、今日では戦前をしのぐ経済成長を遂げ、国際社会においてもその地歩を固めております。

これもひとえに皆様方の尊い犠牲の上に築かれたものと深く尊敬と感謝の誠を捧げるものであります。

御霊よ、今こそ3千軒の虚空を天翔つて故国へご帰還下さい。

昭和42年5月29日

ペリリュー島遺骨収集派遣団代表

厚生省援護局調査課長 西村祐造

- 49 -

RG'-0018

0032

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

別紙あり

ペリリユー島遺骨収集を終つての挨拶

西村代表（通訳ヤノ副支庁長）

私どもはペリリユー島における日本人戦没者の遺骨の収集を完了し、その追悼式を終つて明日遺骨を捧持して日本へ帰ることとなりました。ペリリユー島を去るに方つてお詫びと、お礼と、お願いとを申しあげ一つの祈りを捧げます。

1 先づ最初に申しあげのお詫びは、日本がこのペリリユー島を戦場としたことによつて皆様が家を失い、椰子をうしない、戦後20余年を経た今日なお電灯もない生活を送つておられることに対してであります。このことについて日本国民を代表して心からお詫びを申し上げます。

2 次に私どもの遺骨収集に対して酋長、村長、長老をはじめ連日作業に従事して下さつた方々のご協力に対して厚くお礼を申し上げます。ペリリユー島では日本兵の幽霊が出るとのことですがご覧のとおり日本人の遺骨の収集は完全に終了したのでもう幽霊が出ることは絶対にないと確信いたします。

3 私どもは、遺骨収集を完了したと思っておりますが、或はまだ残つていて山やジャングルへ作業にお出かけの折などに日本兵の遺骨を見つけられるかも知れません。そのときはこれを拾つて村民墓地の中の日本人の墓に埋めて下さい。また日本人の墓と碑とを清潔にしておいて下さい。これがペリリユーの方々へのお願いであります。

4 最後にペリリユーでは近く道路や飛行場が改修され電灯もつ

くとのことですが椰子やバナナなどが順調に育ち魚がよくとれ生活が豊かになり、永遠に平和で健康にお暮しになれるよう心からの祈りをささげます。

別紙才6

グアムの戦跡

"Glimpses of Guam" の

"Boonie Stomping" より抜粋

1 ジゴの日本軍司令部

ここコンクリートの掩壕は、グアム島における日本軍の最後の陣地である。当時の日本軍中部太平洋方面の司令官小畑中将の指揮する約400人以上の日本軍がこの付近で全滅した。

ジゴのローズマリヤ教会から少し北へ行くと左側に学校バス待合所がある。ここを左へ曲り、舗装してない道が右へまがつたところから、あまり使われていない道をまっすぐ行く。ジャングルを通つて150呎ほどまっすぐ歩くと開豁地に出る、右手の小道を行くと開豁地の向う側約60呎のところに小さな木製の日本の道標がある。この道を150呎ばかり行き、ジャングルへはいり下り道を右へ曲る。ここを下りきつたところの右手に、丘の横腹に埋まつた掩壕がある。最初の入口は閉ざされている。2番目と3番目の入口は開いている。懐中電灯が必要である。

不発弾に注意

2 コグナ海岸 (ガン・ビーチ)

オーストラリア海底電信基地のところを西へ曲る。チューモン海岸道路をしばらく下ると最初の交叉点に出る。右へ右へと行くと海岸へ出る。海岸で崖に近い海岸の右側にトンネルの入口が見える。トンネルにはいつて少し行くと、才2次大戦の日

本海軍の曲射砲がある。(砲火で砕けた椰子に注意)

3 サンレーモンの丘の日本軍の複雑なトンネル

才2次大戦中日本軍の陣地構築は、洞窟掘りに特別の才能を示した。海軍道路から4号線を東に曲つたところにある人造洞窟がそれを証明している。4号線の赤灯を過ぎて最初の道を右へ曲る。トンネルは左側2~300呎のところ、ナモレグストアの反対側にある。懐中電灯が必要。

4 戦車戦場

ここへはぜひ行つてみたい。ここで米軍のシャーマン戦車とL, V, T 戦車が日米両軍必死の十字砲火を浴びた、米軍車輛の向う側に、火砲として使用するため埋められている2輛の日本軍軽戦車がある。これらは、ニミッツヒル将校住宅地区の南端にある。戦車は私有地にあるのでその点に注意のこと。

北米局 3
事務 2
北米課長

ハライ諸島事情について
(昭和42.7.27)
(北米課長)

去る5月15日から6月6日まで、政府派遣ハオリエ島遺骨収集団に同行して同島に出張の途次、コロル島において、米國太平洋信託統治政府ハライ支庁関係者及び島民有力者多数と接触した。要見聞したことを別添のとおり報告します。

別添

1. ハライ諸島出張報告
2. 写真報告(コロル島)

GA-6

外務省

2051

工

ハライ諸島出張報告

(昭和42.7.27)
(北米課長)

1. グラム島-コロル島(ハライ)間の連絡

グラム島からトラスト・テリリー・エアラインのDC-4が毎週2便(木曜と日曜)ヤップ島経由でハライまで航行して

いる。この便によると、グラム-ヤップ間約1時間40分、ヤップ-ハライ間は約30分の飛行時間である。ハライ

の空港はハライ本島(バベルダオブ島)の南部アイライ村にある。この空港は約4年前米國が建設したもので、滑走路

の長さは6,000フィートあると取られている。しかし空港としてのレーダー設備等はなく、有視界飛行に依っている。空港とコロル島の

連絡にはマトロバスが1台あり、50セントでコロルまで運んでくれる。空港から

GA-6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0038

クロール島までの間は、舗装のない田舎道で、
途中 パラオ本島とクロール島の間に連なる各
水路 ("~~Rennak~~" channel) があり、この
~~Ren-Rak~~

水路を米軍輸送艇が古びた上陸用舟艇
に乗り入れて、クロール島へ渡る。
（中心地における）
望遠からクロール島の西側のホテルがある

ロイヤル・パラオホテルまでは約30分間の
行程である。このホテルは、パラオ支庁の
近くの元パラオ公園跡の敷地内にある

政府所有の木造平家建ての古い建物で、
部屋数は15軒あり、30人程度収容
できる。経営者は、政府勤務の日系人

医師 ウエキ氏で、彼はこの建物を政府から
賃借して副業として経営に当たっている。
（宿泊料金は^{15日}3食付で10ドル）

2. パラオ諸島の概観

(1) パラオ諸島は、カロリン群島の最も
西に位置し、大小約350の島から
成っている。（日本本土との間に時差はない）

総面積は、179.35平方マイル（パラオ
本島は135平方マイルでミクロネシアの島々
の中で最大の島と云われている）である。

主な島は、バベルダオブ島（通称パラオ本島）、
クロール島、ペリリュー島（クロール島の南30マイル）、
アングウル島（ペリリュー島の南9マイル）^{（の4島）}である。

その他は、南島（大部分岩山の無人島）
と成っている。アングウル島を除いて、
クロール島からペリリュー島に至る間は、

一 大珊瑚礁で取りかまわれており、
この間々の海上には20マイルにわたって
白砂の島が、一列に連なっている。

島民によつて

(所謂 ハラオ本島と云はれる島々をこの海上に点在してゐる。

(2) ハラオ諸島の各島別人口は次のとおりである。

	男	女	計
コロル島	2511	2464	4975
ヘリル島	385	374	759
アガカル島	261	235	496
ハラオ本島及び 諸島	2600	2395	4995
計	5,757	5,468	11,225

現地島民はカカ族に属し、一般に温順で極めて陽気である。

(3) 平均気温は81°F、平均湿度82%で一般に湿度が多く、むしろ暑い。

GA-6

外務省

(4) 漁業、水産資源は極めて豊富であり、ジャングル内には、五嶋(島民は銀バトと呼ぶ)野ぶた、野鶏があり、また、ハラオ本島と

ヘリル島には“人口”が棲息してゐる。

(5) コロル島は、ハラオ本島の属島で、ハラオ諸島の首府であり、商業の中心地でもある。同島の人口は約5000人(戸数500戸)

と云われ日本人を父とし、現地婦人を母とした所謂日本人は50~60%で“植民”
という親睦団体を結成してゐる。コロル

の島民は大部分が政府関係の機関で働いてゐる俸給生活者であり、勤務の暇に、雑貨商等の商店を営んで

(約25%)

いる者が多い。米国人は政府関係職員、宣教師、などを入れても、家族で

GA-6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0040

極めて少数の由である。中には
日本製の各種の自動車が行っている。政府
の公用車もほとんど日本製であった。

米国防託統治政府のパラオ支庁^係内^係は、その資金^とに日本時代の建物を修復に
使用している。たとえば、支庁は元南洋

庁の通信所を、同庁の教育局と^{ハコ}ハコ^{ハコ}ハコ^{ハコ}
は元南洋庁のパラオ病院の建物を使用して
いる。その他、現在、ハワイ銀行が使用して

いるのは元南洋庁の総務部の^{ハコ}ハコ^{ハコ}ハコ^{ハコ}
由であった。

パラオ諸島のなかで、電気、水道の設備の多
うのは、エロル島だけで、現在の水道施設
は昭和15年に日本がつくた施設を初

め、使用して^{あり}、水源池はパラオ本島
にある由である。この水道施設はよく

GA-6

外務省

出来ていて、去る3月1日の同地域を

襲った台風におても破壊されなかった
を取っている。

(5)、現在、同島における産業としては、何等か
るべきものはない。ただ米国の^{ハコ}ハコ^{ハコ}ハコ^{ハコ}
Camp 漁業会社が旧南洋貿易会社の^{ハコ}ハコ^{ハコ}ハコ^{ハコ}
(本社はロサンゼルスにある)

場に冷蔵庫をつくら、漁船は隻に、沖
縄人漁夫50人を雇って、カツオ、マグロ
漁業を行なっている。島民は遠洋漁業は

危険を伴うからとの理由で同社の漁夫とな
ることを好まない。沖縄人を雇っている
を取っている。この会社は、その利益はすべて

本島へもっていくのでエロル島の利益とはなら
ない。由で、島民は別途、彼等だけで
漁業共同組合を結成して、島民が珊瑚礁

GA-6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0041

内とつてくる漁獲を、ボート15セント位
で買っている。島ではボートは
海上交通、リクリエーション、漁釣のための

必需品であるので、政府では同様に小艇
造船所をつくらせ、小型船をつくらせている。

(6) 米信託統治政府は、教育と衛生に
最も力を入れている関係で、エロールに
あるパライオ、ハイスクールの手業式には

サイパン島の判務官府から高官が出席する
由で、本年の手業式(水曜日)は、10名以上
等判務官が来島に出席した。どの島

でも小学校の手業式は、その島の最大の
年中行事の一つになっている由である。
パライオのハイスクールを手業に成績のよい

ものは、政府の奨学金(金額)が支給され
ハワイの大学に留学している。

GA-6

外務省

病院施設として、エロール島に政府直営
のマタリ・メモリアル・ホスピタルがあり、^(米国人ドクター1人を雇って)現地
人のドクター8人(日本人医師2名を含む)、~~米国人~~

~~ドクター1人~~、^(の患者)現地人歯科医4人のほか
看護婦24人が勤務にいて、脳外科、神
経科以外のケースはすべて処理している

が、困難なケースはグム島の海軍病院に
飛行機で移送している由である。パライオ
水域で病気、負傷等により緊急エロール

に緊急入域に来る日本漁船の乗組員
は、年毎15、6件ある由で大部分は
上記の病院で手当を受けていると取られている。

(緊急入域の具体例として、政府関係者のメモ
から得たものを別添する。)

GA-6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0042

3. 政府関係者及び有力島民の話

(1) マツケンジ支庁長及びバヤ次長

3月1日の台風でエロー島民家は、500戸の内、全壊300戸、半壊200戸で、~~あつた~~が、~~あつた~~に水道に被害

があつたので、飲料水には困つてゐる。最近、~~あつた~~バヤ島から建築資材が到着したので、無料でベニヤ板や

トタン板を被災者に配給してゐるが、島民は被害を過大に申告に、~~あつた~~資材を配給を受けて、~~あつた~~置く

化通句があつたので困つてゐる。今度の台風でバナナ、オレンジなどが被害を受けたので、例年より豊富に

ある果物が手に入らなう。

GA-6

外務省

島民に對する救援物資を船便の便でバヤ島から来るのがおくれ。政府には、~~あつた~~から500トン位の

船を、~~あつた~~政府に割り当ててくれる。政府に要求してゐるが、~~あつた~~実現しない。この位の船が、~~あつた~~あれば

政府には、バヤからの物資の輸送がもっと円滑にいくと考へてゐる。

エロー島の産業について、政府にも農業、漁業の指導など考へてゐるが、島民自体は、~~あつた~~やる気

はないので弱つてゐる。特に公共事業には予算の関係で、~~あつた~~行かないが、~~あつた~~ハライ本島の海岸沿

には自動車道を造つて、本島内の

GA-6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0043

村落(ハラオ本島には10カ村ある)由の
連絡をよくしたと考へてゐる。現在^{すに}一部

の測量も行つてゐる。今のところ、本島の島が
スローに出来てくるのはカヌーを利用し
てゐるが、燃料の關係でどうにも日増えり

と云う様には行かぬ不便である。
(ハラオ本島には10カ村で戸数は300戸の由)

島民は島が荒廢したまゝに戦後20数年
の由放置と知つてゐることは大変不満で
あると聞いているが、彼等^は常仲意欲

が強いので困つてゐる。しかし島民は陽気
で親しみやういふ^(約束の)時間を争うな
り化員が強い。

まあ、セ1次^島が語つたところによると、
島民は戦災で被害を受けてゐるので、

GA-6

外務省

~~日本から~~日本からなにかもういふと考へて
ゐるが、例に於て実際の被害を2倍位
に申告してゐる様に聞いている^(軽減)

酋長を合意

(2) 有カ島民等の事

南洋では食米量に困つた。婦人は
自家の畑で何れも野菜を作るのが
仕事だ。男は珊瑚礁内で魚をとつた

山に行つて獲物をとつてくる。のんびり
暮らすとがよいと考へてゐる。しかし
政府が道路をよくしてあげるの

困る。内地(彼等は日本を内地と云う)は
随分古くつてゐるので、時々旅行す
ることにしている。米回は島を荒廢した

まに放置にゐるが、ハラオ本島と云ふ
おいてゐる位お新柄なので、観光事業
をやつて、お客を呼ぶに決まると云ふ

GA-6

外務省

ば島の経済は随分うまうといつても
過言でない。莫い最近東京-グアム間の
直行便がパン・アメリカンにモーター開設

されたので、ハワイの飛行場にはジェット機
が着陸できるようになり、将来観光
客を吸収したい。このため政府は

は入域許可をもっと簡単にすると陳
述している。(島民で年配者は皆流
暢な日本語を話す。)

GA-6

外務省

4. 今回のコロール島、ヘリリエ島出
張を面して感じたことは、島民の面
で意外と評判のよくないのが、米国の

信託統治政府である。米国は搾取も、
圧迫も、虐待もしなかったが援助らし
い援助を全く~~な~~なかった。米国は

教育と衛生に力を入れているが、島は
戦後20数年を経ても~~島~~荒廃し
たに放置されている。ジャングルの中には

一歩入れば米知事の弾薬、武器、
遺骨が放置されている。島民たち
は、島の経済的繁栄がたい

生活をもちたうにくれることは知って
おり、産業の復興を望んでいる。しかし
彼等は自らの力で企業を興してい

GA-6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0045

アイディアはなく、~~特~~、竟然もない。南洋
特有の環境におり、食糧に恵まれ
最低生活は保証されているので、

島の中のんびり暮らに行かれる。彼等が
文句を云っているのは、なじみ難い米国式
生活に反響を感じて、^(36歳)~~日本時代~~

への郷愁を感じて、~~あ~~東京の
ラジオ放送に身も心も、日本語を話し、
^{馴染やま}日本の歌をうたっているように見受け
られる。

GA-6

外務省

別添

ハラオ水域緊急入域
(具体例)

1. 天竜丸 (27トン)

船主 濃貝島県串木野市所在
天竜産業(株)

負傷船員 77ヤマ・エタカ(20才)
左腕負傷

65. 11. 8 22:10 入港
10:00 A.M.

同日 14:30 出港

65. 11. 14 09:00 入港

" 16:30 出港

2. 長福丸 (39トン)

船長 ヤカスジ・スズオ

船主 青元 49-ヤエモン

65. 11. 13 08:30 入港

" 17:00 出港

(病人引取のため再入港)

GA 6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0046

3. 竜蔵丸 (38トン)

船主 テラモト・アサヒコ
和歌山県 勝浦市

新人 7ルハレ・マサヒロ (16才)

65. 11. 17 17:20 入港

" 11. 18 17:30 出港

4. 黄栄丸 (30トン)

Reg. NR. WK 2-13

船主 和歌山県 十ヶカブラ町

ヒラミ・サツエモン

新人 ハマダ・1ボイル

(釣針で負傷)

65. 11. 18 09:00 入港

" 12. 3. 11:30 出港

5. 水ノ福丸

船長 三兵衛 徳次 (29才)

船主 三重県 度会郡 南勢町 日富浦

福丸 漁業 (米)

GA 6

外務省

登録番号 78552

漁船登録 No. 1-206

新人 ヤマカ7・ヒヨジロウ

65. 12. 25 08:30 入港

" " 15:00 出港

6. 海草丸 (99トン)

高知県 永豊試験所 新属船

(漁業中の船員引取のため)

66. 2. 2 10:40 入港

" 2. 3 13:00 出港

7. 大和丸 (99.8トン)

KG 2-2825

船長 籠亀 啓吉

(高知県 土佐市 宇佐町 宇佐 279~1)

船主 東 栄軒

(鹿児島県 薩摩郡 山川町 金生町 42)

GA 6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0047

病人 泉 玉吉 (福島県)
 随添人 三浦 崎形一
 66. 2. 3. 14:00 入港
 " 2. 5. 08:00 出港
 以上の患者は 2/28 出帆の 米 7 福丸
 (船長 三浦 徳次) に便乗 帰国した。

8. 米 18 優勝丸 (99.5トン)
 船長 熊浦 敏文
 (青森県 大川郡 知内町 小田)
 乗船登録番号 KA 2-890
 船主 唐木 漢業 (株)
 (香川県 津田港)
 病人 堀本 清元 (30才)
 (鉈針を腕に8センチの負傷)
 航空機で11日目を手配在航中
 66. 3. 12 07:20 入港
 " 3. 12. 11:30 出港

GA 6

外務省

9. 米 7 鉄神丸 (39.79トン)
 船長 中筋 康夫 (29才)
 乗船登録番号 NO. 27-2-144A
 船主 長尾 明子
 (和歌山県 東牟婁郡 那智勝浦町)
 病人 (女 名 不詳)
 盲腸手術。
 航空機で11日目を手配 (5/13/66)
 66. 4. 7. 8:00 入港
 " 4. 8. 8:00 出港

10. 米 15 立勝丸 (48トン)
 船長 立木 史郎 (35才)
 (和歌山県 東牟婁郡 那智勝浦町)
 乗船登録番号 WK 2-1670 J12H
 船主 立木 孝一
 (和歌山県 東牟婁郡 那智勝浦町)
 病人 猪飼 隆 (36才)
 (眼病)
 66. 4. 7 入港
 " 4. 11 出港

GA 6

外務省

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0048

11. 瑞山丸

船長 森田 幸浦

66. 4. 25 入港

" 4. 26 出港

12. セイコー丸 (23船)

船主 仁田 富吉

(徳島県海部郡村玉町出泊島)

13. 水6 幸甚丸 (71.06トン)

船長 西本 政夫

(徳島県串本町市西浜町124)

船主 西本 政夫(株)

66. 10. 21. 07:50 入港

" 10. 21 12:00 出港

新人 吉井 洋一 (23才)

(徳島県日置郡伊集院町)

67. 1. 17 帰国

GA 6

外務省

14. 光南丸 (39.90トン)

船長 西川 定春 (39才)

船主 西川 徳一 (101215)

(和歌山県那智郡)

乗船登録番号 NO. 80045

船の機関修理のため

GA 6

外務省

2.

フロール 島 写真報告
(ハロオの苗群)

北米局北米課
(相川報告)



ハロオ本島 (ハバスターダオブ島)
上空



ハロオ本島
上空

RG'-0018

0050

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



上野島



松島



ヤノ、ハロオ支庁次長
後方はハロオ支庁庁舎（元南洋庁通信所）



ハロオ支庁庁舎

RG'-0018

0051

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



ハワオ支庁教育局
(元南洋庁ハワオ病院)



コロール郵便局



ハワオ議会



警察 及び 消防
3月2日の台風で屋根はない。

いざれも南洋庁の建物であった。



ハワイ銀行
(元南洋庁々舎)



ハロオ、ハイ スクール
(元南洋庁ハロオ病院)
3月2日の台風で屋根がこわれている。



ヨール島渡正場
信託船沿地域の船は、
船尾に信託船波旗(パールの地に星が6つ)を、
マストに米国旗旗をかがけている。



ヨール島渡正場(海上制空)
(旧時代のものを今も使っている)



イロハ島の食糧雑貨店



イロハ島のスーパー・マーケット
日本、アメリカの雑誌類を販売している。



イロハ島の造船所(パラオ大学由)



この波止場からボートでペリリュー島
に渡った。ボートは2人乗りのもの。

RG'-0018

0054

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



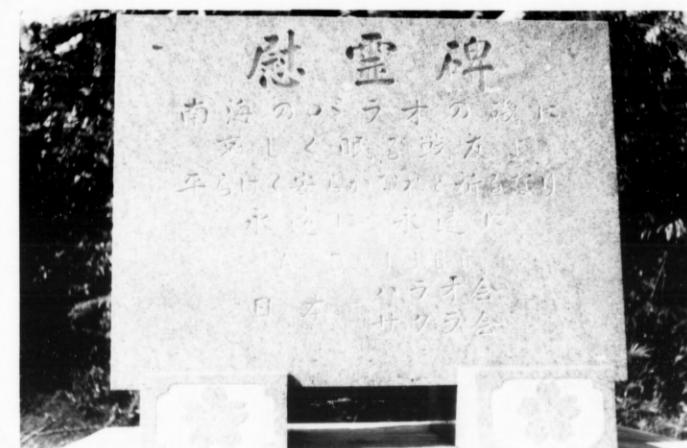
ハラオ本島からコロル島に渡る渡船場。
古くは米軍の上陸用舟艇に車を積んで渡る。
この海峡は ~~Rennell~~ ^{Neo-Rak} Channel と呼ばれている。
旧日本海軍は、この水路を単艦通過していた。



コロル島の元日本海軍の水上飛行場
(現在は使用していない。)



コロル島日本人墓地



コロル島の日本人会が戦没将兵
のために建立したものの



マール島泊止場



マール島泊止場風景
この船はヤップ島からマールに
人と物資を運ぶ定期船



マツケン・バウチ支那系(米人)
ボートの曳き手(次長)及び同乗人(日本人)

RG'-0018

0056

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



ハロウ諸島の島を渡る定期船
(米軍キートンの上陸用舟艇)



ハロウ島からスロッド・ボートで
約1時間半の航行にある
島で、リクレエーションの場として
使われている。



5月21日 シロポート(3隻)に搭乗して
ミッドウェー島へ向かう。



ボートの着場

RG'-0018

0057

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan



RG'-0018

0058

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

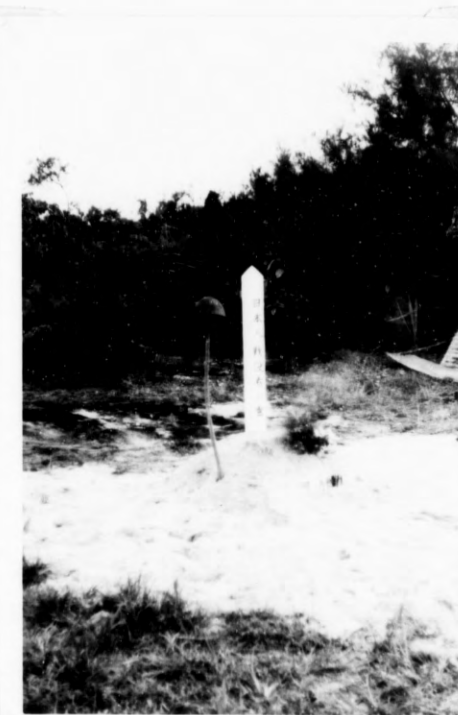
Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan



マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の



マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の



マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の
マヤン・ハリス長官と一行の

RG'-0018

0059

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

ヘリリユー島関係



←南

ヘリリユー島 (東方海上より撮影)
(2010島の南方30哩に位置している)

→北



ヘリリユー島 南部に在る
元日本海軍飛行場
米軍のヘリリユー進攻はこの飛行場を奪取
するに努めた由。

RG'-0018

0060

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



ジャングルを歩き遺骨を探がした。



収集した遺骨を^{日本製の}トラック(小型ダイハツ)に積んだ。



ヘリリユ-島南岸 オレンジビーチ
付近のジャングルにて。迫撃砲弾

RG'-0018

0061

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



遺骨を求めてジャングルを
進む。



洞穴の入口



洞穴内から遺骨を運び出す。



洞穴の中で

RG'-0018

0062

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



洞穴内（ペリリュー島中部の山腹に）



洞穴内（全上）



ペリリュー島南部に在る
元日本海軍司令部（3階建）
はジャングルの中に埋もれていた。



同司令部（3階）



元日本海軍司令部
(ヘリュー島)



(同 上)



オレンジ・ビーチ (ヘリュー島南部)
米軍は昭和19年9月15日
ここから上陸した。(激戦地)



オレンジ・ビーチ
背後のジャングルの中には
多数の壕があった。
(激戦地)

RG'-0018

0064

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



オレンジビーチの一部



オレンジビーチ
米軍戦車の残骸の
残骸が散らばる



洞窟から取り出した遺骨



収集した遺骨を一時 元日米海軍司令部
に集めた。

RG'-0018

0065

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



収集した遺骨をヘリリユ-島 現地人
共同墓地にて火葬に付す。



火葬した遺骨



火葬した遺骨の大部分
は共同墓地に埋葬
した。

ヘリリユ-島で戦没した
日本将兵は満州が14回
(永年、宇都宮、高崎の連隊)
の現役兵であった由。



火葬当日(5月29日)、火葬に立会った酋長(向う右)
及村長(向う左)



ヘリシェー島大丘上
にある米軍の石碑

昭和19年11月24日
ヘリシェー島守備隊
中川重雄隊長が自決
したと云われる所。

(日本軍最後拠点)



米軍上陸用舟艇の残骸。



ヘリシェー島北岸 (現在ニシに新設がある。)



祥雲のカドグス島 (ヘリシェー島北岸より)

島民はカドグス島に椰子を9000ト
植えて、ヘリシェー島民共同管理に
した。



ペリリュー島北岸の村(島民はニニロ能い)



ペリリュー島の食糧品店
(元々雑貨店を兼ねる)



ペリリュー島の子供
野鳥を飼っている(ジャングルに多くの野鳥がいる。)



ペリリュー島の小学生

RG'-0018

0068

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



ペリリュー島の小学校



同上



小学生



ペリリュー島の青年
(この青年は大工の由)

RG'-0018

0069

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



椰子"がに"



ペリリュー島南岸の船着場
ニから アンガウル 島への定
期船が出る。



ペリリュー島 → アンガウル 島 向
の定期船



同上

RG'-0018

0070

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



ヘリエ島の日系婦人（向て右から）



アムステルダムからの定期船が着いた。



RG'-0018

0071

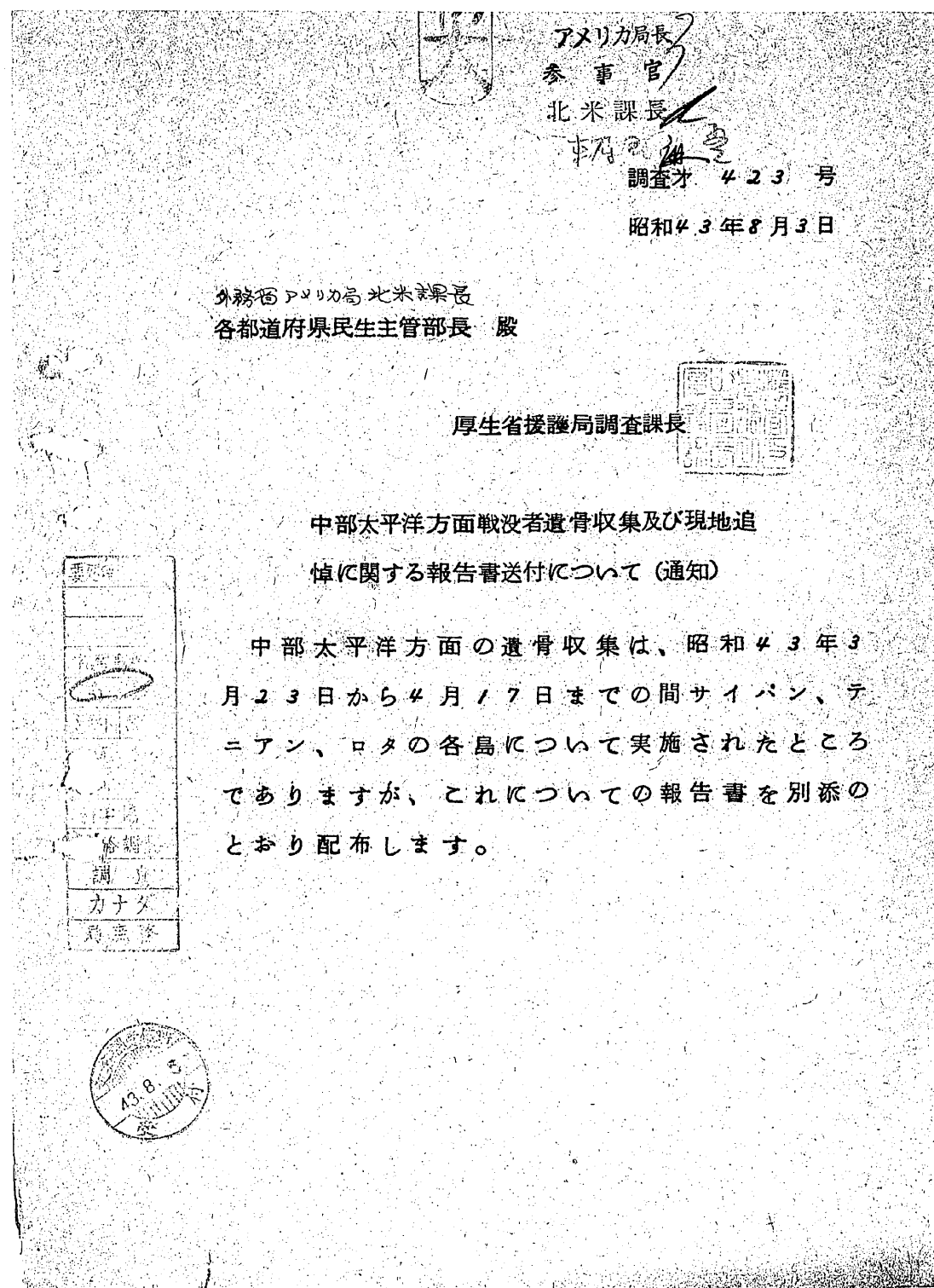
外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan



RG'-0018

0072

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

中部太平洋方面戦没者遺骨収集
及び現地追悼に関する報告書

昭和43年5月
厚生省援護局

RG'-0018

0073

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

目次

第 1. 遺骨収集を実施するにいたった経緯 1 頁

 1. 当初計画の大要 3

 2. 米国政府との交渉経過の概要 9

第 2. 遺骨収集等実施の状況 31

 1. 各島共通 31

 2. サイパン島の収骨及び行動 37

 3. テニアン島の収骨及び行動 57

 4. ロタ島の収骨及び行動 71

 5. 各島共通 81

第 3. 信託統治領政府の協力と島民の感情 83

別 紙

第 1.	中部太平洋遺骨収集派遣団行動日程表	85頁
第 2.	中部太平洋遺骨収集実施計画	86
第 3.	日本人戦没者追悼式式次第等	89
第 4.	派遣団から本省への連絡要領	91
第 5.	遺骨収集派遣団携行品明細表	93
第 6.	遺骨収集派遣団事務用消耗品明細表	94
第 7.	携行薬品等品目	95
第 8.	サイパン島判名遺骨の本籍及び氏名	97
第 9.	サイパン島遺骨品(認識票、印鑑)	99
第 10.	サイパン島遺骨収集場所及び収骨数図 示	101
第 11.	サイパン、テニアン追悼の辞	102
第 12.	テニアン島遺骨収集場所及び収骨数図 示	104
第 13.	ロタ追悼の辞	105

第 1. 遺骨収集を実施するにいたった経緯

さきの大戦において中部太平洋方面で戦没した者の遺骨の収集、建碑及び現地追悼については、政府において昭和28年米国側の協力のもとに実施したところであるが、人員、日時等の関係で遺骨収集の目的を十分果せなかった。一方、最近該方面への旅行客等から未処理の遺骨が発見されている旨の提報があったこと及び諸種の民間団体等による遺骨収集の企画等の続出が見られるにいたったこと等から政府は、従来の遺骨収集を補完し最終的措置を行なうためサイパン、テニアンの両島及びロタ島並びにウオールアイ環礁(メレヨン島)における戦没者の遺骨の収集並びに現地追悼を行なうこととし、中部太平洋方面における戦没者の遺骨収集計画を定め、昭和42年10月6日外務省を通じ米国政府に対し計画する遺骨収集の承認方に関し申し入れを行なった。

計画の概要及びその後の米国政府との交渉経過等は以下記述のとおりであって、今回は、サイパン島、テニアン等及びロタ島について遺骨収集並びに現地追悼

(1)

を行なうこととなったのである。

(2)

1. 当初計画の概要

サイパン島、テニアン島、ロタ島及びウオールアイ環礁(メレヨン島)における戦没者の遺骨の収集計画

1. 遺骨収集の趣旨及び目的

政府は、昭和28年1月31日から同年3月19日の間派遣団をサイパン、テニアン、硫黄島、グアム、ウェーク、ペリリュー、アンガウル及び南鳥島の各島に、また、昭和28年5月ペリリュー島に差し向け戦没者の遺骨の収集を実施したところであるが、日程等諸般の事情からなく旧戦場を踏査して遺骨収集の目的を十分果せなかったところがある。また、ウオールアイ環礁(メレヨン島)及びロタ島の戦没者の遺骨の収集は現在まで行なわれず、わずかに昭和27年4月に民間の現地慰霊団がウオールアイ環礁(メレヨン島)に渡り、現地追悼を行なったにとどまり、未だ相当の遺骨が残っていることが判明した。

今回、政府は、これらの地域に遺骨収集団を派遣し、

(3)

遺骨を収集し関係遺族の要望にこたえようとするものである。

2. 派遣の要領

(1) 遺骨収集を実施する地域

サイパン、テニアン、ロタ、ウオールアイ環礁（メレヨン島）の各島（要図別添）

(2) 派遣団の編成

ア. 厚生省職員 5名

イ. 外務省職員 1名（約10日間）

渉外担当として外務省（本省）職員の参加を依頼する。

ウ. 現地において現地語通訳を各島毎に1名及び必要数の作業人夫を雇傭する。

エ. 報道関係者若干名が派遣団に同行することがある。

(3) 派遣の時期

派遣の時期は、この事業の実施に伴う細部事項について米国政府の了解が得られたのち、昭和43年2月上旬から同年3月上旬までの約1箇月を予定する。

(4)

(4) 派遣団の行動（付表）

ア. 東京、グアム島間の往復は定期航空便を利用する。

イ. グアム島において派遣団を第1班（サイパン島、テニアン島、ロタ島の遺骨収集）と第2班（ウオールアイ環礁（メレヨン島）の遺骨収集）に分ける。

(ア) 第1班（サイパン、テニアン、ロタ）

グアム島、サイパン島間及びサイパン島、ロタ島間は定期航空便を、サイパン島、テニアン島間は舟艇を利用し、島内は自動車で行動する。

(イ) 第2班（ウオールアイ環礁（メレヨン島））

グアム島、ヤップ島間は定期航空便を、ヤップ島、ウオールアイ環礁（メレヨン島）間はヤップアイランダーを利用するか又は民間航空機を借り上げる。

なお、環礁内の各島間は現地のカヌーを利用する。

ウ. 現地における事前打ち合わせのため派遣団の一部をグアム島に先発させる。

(5) 遺骨、遺留品の収集

(5)

遺骨、遺留品の収集は、日本政府が保有する資料並びに現地米軍機関等及び現地民からの情報に基づき、仮埋葬地の発掘及び旧戦場の踏査によって行なう。

6. 追悼行事

サイパン、テニアン、ロタ及びウォールアイ環礁（メシヨン島）の各島において、遺骨収集が終わったのち、それぞれ簡素な追悼の行事を行なう。

(6)

RG'-0018

0078

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

留品の収集は、日本政府が保有する資料並
軍機関等及び現地民からの情報に基づき、
発掘及び旧戦場の踏査によって行なう。

テニアン、ロタ及びウオールアイ環礁（メ
各島において、遺骨収集を終わったのち、
な追悼の行事を行なう。

(サイパン、テニアン、ロタ、メレヨン) 昭和48年度 遺骨収集実施計画(案)

曜	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火		
日数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
行	先発員(1人) 東京発							1人発 サイパン着							(サイ) パン班から分離ス人							サイパン発 東京着							現地機関挨拶			
	(滞在) 現地機関挨拶 打合せ手続							現地機関挨拶							(メ) レヨ							現地機関挨拶							現地機関挨拶			
事	現地機関挨拶 打合せ手続							現地機関挨拶							(メ) レヨ							現地機関挨拶							現地機関挨拶			
	現地機関挨拶 打合せ手続							現地機関挨拶							(メ) レヨ							現地機関挨拶							現地機関挨拶			
摘 要	現地機関挨拶 打合せ手続							現地機関挨拶							(メ) レヨ							現地機関挨拶							現地機関挨拶			
	第1日を2月6日と変更																															

(6)

(7~8)

RG'-0018

0079

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

2. 米政府との交渉経過の概要

(1) 日本国政府から米政府に対する申し入れは、時あたかも佐藤総理の訪米に関する日米交渉が行なわれていた時期であったため対米交渉が若干遅れざるを得ない状況であったが、昭和42年12月初め本件交渉は在日米国大使館を通じ太平洋信託統治領高等弁務官との間において行なうこととなった。

(2) 昭和43年1月8日外務省は申し入れ書を在日米国大使館に手渡した。その際米国大使館の担当書記官は、「かねて承わっていることであり許可されると思うが、時間がかかるので、日本側の予定（注…2月6日先発員出発の予定）どおり準備されたい。先にマーシャル地区のクエセリン及びエニウェトツフの遺骨収集実施についても承わっているが、同地区はセキユリテイーゾーンであるので、その実施は困難であろう。」と語った。

申し入れの内容は、次のとおりである。

(9)

トーキング・ペーパー（昭和43.1.8）

1. 日本国政府職員6名およびメレヨン会々員2名よりなる一団の、下記島しょ訪問計画について、日本国政府はアメリカ政府の同意を要請いたします。すなわち、第2次大戦における日本人戦没者の遺骨収集のため、また、上記戦没者の追悼式実施のため、厚生省は、中部太平洋にむかって（すなわち、サイパン、テニヤン、ロタ、ウオレアイ環礁へ）上記一団の派遣を計画中であります。本派遣団は政府職員中の1名が団長として行動し、メレヨン会々員は、主として、各島しょにおいて行なわれる追悼式に参加するものであります。本派遣団は本年2月から3月の間に上記の島しょを訪問する計画であります。本計画に関する詳細は別添文書のとおりであります。

2. 日本国政府は、1953年と昨年5月に、同種類の公式使節団を、この地域に派遣しました。しかしながら、派遣団の団員数や滞在日数の制限されていたような理由からして、まだ十分満足すべき結果に到達しておりません。この地域の島しょには、まだ相当数の日本人戦没者

(1)

の遺骨が、未収集のまま、残されているものと推定されます。

3. 本派遣団の遺骨収集に関する諸準備作業は、日本国政府の所有する情報および資料にもとづき、現在、進行中ではありますが、「戦場における軍隊の傷病兵の状況改善に関する1929年7月27日のジュネーブ条約」にしたがい、サイパン、テニヤン、ロタおよびウオレアイ環礁において、アメリカ軍の手によって処理された戦没者遺体と不発弾の推定数、その場所について、アメリカ政府より利用しうる情報のご提供を願えば、日本国政府としては、まことに幸甚に存じます。

4. 本派遣団については、日本人報道人の同行が予想されますので、報道関係者から入国許可申請のあった場合は、上記地域の入域に関し、貴国政府の好意あるご配慮を希望いたします。

5. なお本計画のほか、日本国政府は1969年以後において、入域が許可されるならば、エニウエトツフ、アゼリンおよびミリ環礁むけ、同種類の派遣団派遣実施を、

(1)

目下考慮中であります。

以 上

(3) 昭和23年1月25日、米側に回答を督促したところ翌1月26日米側から回答まであと1週間(注:2月2日まで)かかる旨の連絡があった。

ここにおいて派遣団の派遣時期は、米側の回答があった時点であらためて検討することとするが、仮りに2月2～3日ごろ承諾の回答があった場合においても先発員の出発は2月20日以降とすることとした。

(4) 2月2日米大使館から派遣団の派遣を延期してもらいたいと、ワシントンから連絡があった旨及びこの件について太平洋信託統治領高等弁務官が2月ワシントンを訪問し、打ち合せる旨の通知があった。

(5) 上記に対し、厚生省は予定通り準備を進め、大体これを終わっているうえ、日本国民特に関係遺族及び団体から強い要望もあるので、すみやかに実施できるよう特別の配慮を願う旨重ねて米側に申入れを行なった。

(6) 上記の申入れに対し、米側から要旨次のような回答が

(12)

あった。

ア、高等弁務官は、2月中旬ワシントンを訪問し、3月1日帰任する。

イ、この訪問間に信託統治領にある日本人戦没者の遺骨の処理方針に関し国務省等と打ち合わせる。

ウ、帰任後信託統治領としての前記の処理方針を決定する。

エ、日本政府の遺骨収集団の派遣は前記の方針決定まで待ってもらいたい。

(7) かねて本問題の解決のため交渉の場をワシントンへ移すべく駐米日本国大使へ訓令中のところ、2月7日同大使から要旨次のとおりの報告があった。

「この問題の解決について内務省と連絡したい旨国務省に申し入れを行なったところ、国務省は高等弁務官は、2月20日ワシントンの会議に出席するので、その辺の話し合いを行ない2月中に最終的な回答ができると思う。」

(8) 2月22日駐米日本大使から下記の電報報告があった。
21日国務省日本部に対し信託統治領地域ノーウッド高等弁務官との話し合いは進展せるや問合せたところ、先

(13)

方係官は同高等弁務官は目下議会の公聴会に出席のため
忙殺されており遺憾ながら未だ結論をだせずにいるが、
26日には日本側になんとか回答したいと思う旨述べた。
当方より見通しにつき、たまたところ国務省としては
交通整理の観点からも本件日本政府派遣の遺骨収集団の
受入れを実現したいと思っている。ただし、昨年末の台
風による損害と、きたる5月を目前に行なっている航空
業務のジェットへの切り換えの過渡期にあるため現地の
輸送事情悪く、場合によっては新聞記者の同行は遠慮し
てもらうことになるかもしれないと述べていた。
当方より期日も切迫していることであり、早急に結論を
だしてほしい旨依頼しておいた。なお、先方は沖縄から
も台風シーズンに当たらない1月ないし6月の間に同地域
への遺骨収集団の派遣方につき申出を受けている旨付言
していた。

(9) 2月26日駐米日本大使から下記の電報報告があった。

27日国務省日本部係官から聴取したところは、次のと
おり。

ア 国務省、内務省、関係者はノーウッド高等弁務官を

(14)

交え検討を行なった結果、日本から遺骨収集団を受け
入れるとの結論に達した。ただし、受入れのための諸
行政事務手続等極めてはんさであるので、目下申し入
れのある沖縄の遺骨収集団と合同で現地に赴きたい。
これまで米国施政権下の地域に合同で遺骨収集団が赴
いたことは53年及び67年にあると承知している。

イ 受入れ得る人員は沖縄からのを含めて全部で30名
であり、その限りにおいてはメレヨン会員、報道関係
者が参加されて差支えない。

ウ 日本側において本年度事業の場合には3月9日まで
に関係者が出発しなければならないとすれば沖縄との
調整を要することだし時間的にきゅうくつなことはよ
く解るが、合同で実施してもらうこと、今回巡回地域
については今次派遣をもって終わりにすることが高等
弁務官の強い希望である。

エ 沖縄の遺骨収集団の性格は詳かにしていないが、船
をチャーターして50名位で現地に赴くとの希望を琉
球政府は表明している。従って、イの30名の枠との
関係で琉球側との調整を要し、又視察地域にはサイバ

(15)

ン、テニアン等が含まれているが、細い所では日本側の希望されている巡回地域と異なることが予想され、右については現地当局を含め三者で調整すれば解決可能と考える。

沖繩の予算は承知していないが、人員を切りつめれば航空費支弁も可能でないかと考える。

オ、高弁務官は3月8日ごろ日本経由（滞日日数不明）で帰任するにつき、在京大使館及び同弁務官と東京で詳細打合せされることをお勧めする。

カ、本件については、日本側には在京大使館を通じ、又沖繩については同地高弁務官を通じて琉球政府に連絡するにつき、困難とは思いますが、沖繩側ともしかるべく連絡調整を図られたい。

(10) 2月28日厚生省は上記の電報報告を検計の結果、既定の中部太平洋信託統治領地域における遺骨収集は日本政府として単独でこれを実施することとし、次の事項を米側へ申し入れ方外務省へ依頼した。

中部太平洋信託統治領地域における戦没者の遺骨の収集については、日本政府としては、次の理由により単独

(16)

でこれを実施することとしたいので、その速かな実現について特段のご配慮をお願いしたい。

ア、日本政府としては、海外戦没者の遺骨の収集は国の責任と主体において実施することとし、民間団体には現地慰霊及び戦跡巡拝を主とするよう指導してきている。

この線に沿い、沖繩出身の戦没者についても日本政府の責任で遺骨を収集しており、収集した遺骨のうち氏名の判明するものは沖繩の遺族に渡すこととしている。

注：貴国在京アメリカ大使館の覚書によれば、「日本政府と琉球政府は太平洋信託統治領以外の地域では同じような派遣計画で協力していたように当方では了解している。」とあるが、過去において日本政府が琉球政府と合同で遺骨収集及び墓参を行なったことはない。

イ、日本政府の派遣団は、遺骨収集が目的であり、旧戦場で遺骨が残っている地域を重点的かつ集中的に作業することとしており、他方、沖繩側は墓参、戦跡巡拝

(17)

及び祖先の墓から分骨を持ち帰ることが目的である等
両者は全く性格を異にしているので、日程、現地での
行動内容、団の人員構成等から見ても両者を調整する
ことは極めて困難である。

(11) 2月28日駐日米大使館から次の覚書を受領した。

1968年1月8日付貴省トーキング・ペーパーに
おいて提起せられた太平洋信託統治領むけの遺骨収集
団の件に関し、当大使館は、次の線に沿う訓令を受け
ました。

アメリカ合衆国政府の信ずるところによれば、日本
と琉球の合同派遣団がこのことに当るということは、
もっともセンスのあるやり方であります。

こうすれば別々の派遣団をもって行なう場合に起るこ
みいった行政上の諸問題をすみやかに解決することが
できます。そこには、日本人の遺骨と琉球人の遺骨の
区別の問題があり、また一方の派遣団がある地区の訪
問をときに許可されれば不平が起る余地も残されます。
日本政府の提案も、琉球政府の提案も、テニアンとサ
イパンの遺骨収集を考えているようであります。日本

(18)

政府と琉球政府は、太平洋信託統治領以外の地域では、
同じような派遣団計画で協力をしていたように、当方
では了解しております。

3月31日前に、派遣団を出国できるようにするた
め、あらゆる努力をはらうという点に関しては、当方
も賛成であります。しかし、こみいった組織上の問題
やこまかい日程作成の仕事が、3月31日まで完了し
ないばあいには、日本の派遣団員は、とりあえず、切
符だけ買ってしまうか、そうでなければ、出発は昭和
43会計年度の年頭までおくれるとしても、昭和43
会計年度の支出となるよう必要経費をとっておくよう
に、当方は希望いたします。

ノーウッド高等弁務官はアメリカから東京経由で帰
任することに同意しております。それは当大使館、日
本政府および東京へ当方の要求で出向いてくる琉球政
府の各係官とともに、派遣団の出発準備を援助するた
めであります。(日時決定のさいは、当方よりお知ら
せいたします。)

日本政府および琉球政府職員の実施するサイパン島に

(19)

おける遺骨収集継続作業についても、同様出発前に、詳細の点を完成する必要があるでしょう。

信託統治領における輸送機関や宿泊設備に余裕がないため、派遣団員数は30名が限度であると考えます。ウオリアイ島訪問には特別の手配(たとえば、船をチャーターすること。)が必要であります。このことを除いて、現行の航空機関で十分であります。

予期しえない状況の起るばあいを除いて、当大使館は、この今回の派遣団が訪問地域内において遺骨収集業務を完成しうることを期待しております。

(12) 3月9日厚生省は今後における信託統治領地域の戦没者の遺骨収集について下記事項の米側への申し入れ方外務省へ依頼した。

ア. マリアナ及びカロリン群島のうち今回遺骨収集を実施する地域については、政府としては、これをもって終了するものと考えている。

ただし、この地域は多数の日本人が戦没したところであり、今回の遺骨収集が終わった後において遺骨が発見された場合にはこれを適宜の方法で日本政府に引き

(20)

渡されるよう取り計らわれない。

イ. マーシャル群島(エニウエトッフ、ケゼリン及びミリ環礁等)については先般同地域がセキュリティーゾーンであるため遺骨収集は困難である旨承わっているが、この地域のうちにおいても日本人が多数戦没した島々があるのでなるべく早期にこれらの島々の遺骨収集が実現できるよう格段のご配慮を願いたい。

(13) ノーウッド高等弁務官は、3月10日未日、翌11日外務省北米局長らと会談、次いで琉球政府儀間厚生局長らと会談し、沖縄の墓参団の性格等に関しては、高等弁務官はこれを了解した。

厚生省援護局長らとの会談は、同日14.30から16.30までの間外務省において行なわれ、わか方からかねて申入れてある遺骨収集の実現方に関し再考方強く申し入れた。

これに対し高等弁務官はヤップ ←→ ウオールアイ環礁(メレヨン島)間の交通機関の状況を現地に電照する等誠意をもってこれに臨まれ、本年3月中における公式日本政府派遣団の信託統治領地域訪問の許可を促進するこ

(21)

とに同意した。

この会議の了解覚書は次のとおりである。

(覚 書)

下記は、1968年3月11～12日、太平洋信託統治領地域の日本人戦没者の遺骨収集に関し、日本政府の外務省、厚生省代表、ノーウッド信託統治領高等弁務官および在東京アメリカ大使館員の間で決定された一般的了解事項である。

日本政府の方針は、次のとおりである。日本政府は、信託統治領地域の第二次世界大戦戦場における日本人戦没者の遺骨収集については、正式の政府派遣団(それはいつもきわめて小人数であったが。)が派遣され、かくて、たまたま近づく場所にあった主要残骨が、現地において火葬され、その遺骨が日本に送還されたときは遺骨収集は完了したものとする。第二次世界大戦にあたり海外において戦死した200万人以上の戦没者の遺骨で、日本に送還されたものは、その約3分の1だけである。しかも日本政府として、東アジアのさらに近づく

(22)

がたい洞窟やジャングル内に散在する戦没者の遺骨を徹底的に捜査することは、現状においては、財政が許さないことが明らかである。従って、日本政府は、信託統治領地域に関しては、他の地域におけると同様、政府派遣団の帰還後発見される日本人戦没者の残存遺骨は、その発見された地域の地方当局の好意により、可及的適切な取扱いのなされることを希望する。日本政府として、より以上に希望するところは、その種の遺骨は、飯ごう、防毒面、認識票等の物品とともに、日本へ送還せられることである。これらの物品は、戦死者の氏名、部隊名調査の手がかりとなるものである。この種の遺骨が日本むけ送還される場合には、発見場所、発見日時等を、各遺骨ごとに添付せられることを、日本政府は希望する。

太平洋信託統治領地域において、日本政府派遣団が今なお関心をもっている島は、サイパン、ティアン、ロタ、ウオールアイ、ミリ、エニウエトッフとケゼリンだけであると、日本政府は考える。これらの島々に政府派遣団が派遣され、人の目につく、近づくやすい場所の遺骨が収集されたあかつきは、たくさんの遺骨が発見され

(23)

たという新しい情報が入った場合を除き、重ねて信託統治領地域むけには、政府派遣田派遣の要求は行なわないものと、日本政府は考える。

日本政府の今次の計画は、1968年3月中に出発予定の派遣田がマリアナ諸島むけの最終派遣田となること、また、交通機関の都合がつく場合は、この派遣田はウォールアイ環礁において同様の作業に従事することである。日本政府は現在、昭和43年会計年度には、この他の派遣田派遣計画の予算措置を行なっていない。日本政府はミリ、エニウエトックあるいはケゼリンむけの派遣田派遣計画が考慮される場合には、十分時間をおいて前もって、大使館を通じ、協議する。エニウエトックあるいはケゼリン入域に関しては、日本政府は、特別の問題があるという事実について決意を喚起された。

原則として、厚生省は、海外むけ公式派遣田を派遣することにより、海外残存戦没者遺骨収集事業に関してはもっぱらその責に任ずるものである。これが日本政府の方針である。しかしながら、海外旅行からの帰国者について、もと戦場を訪問の途次たまたま発見した遺骨は厚

(24)

生省として受領すると約束しても、その取極めは有効である。

ノーウッド高等弁務官は、会談した日本政府係官に対し、高等弁務官事務所としては、一般人の遺骨収集については、事実上厳禁政策を採用しているむね通告した。会談における日本側代表は、高等弁務官事務所が一般人の遺骨収集を禁止するようになった理由は十分了解することができると述べ、法的に日本政府としては、日本人旅行者に対し、遺骨収集をしてはならないと強制することのできる立場にはいないが、厚生省としては、この問題に関心があり、厚生省と緊密な関係のある遺族会や旅行代理業者等に対し、信託統治領地域当局の一般人遺骨収集禁止方針とその理由を通知すると語った。その理由は次のとおりである。

(A) 遺骨収集関係者がしばしば遭遇していることであるが、この地域には不発弾の危険があること。

(B) ありそうに思われないことであるが、旅行代理業者や非公式のガイドなどが、戦没者遺骨を個人的な儲け仕事の対象としていること。

(25)

(13) すべての一般人の遺骨収集が禁止されないかぎり、
文化的伝統の日本人とちがう、日本人以外の一般人
に対し、残存遺骨をみやげものと考えてもよいと考
えさせること。

上記の諸点を基盤として、ノーウッド高等弁務官は、
1968年3月中における公式日本政府派遣団の信託統
治領地域訪問の許可を促進することに同意した。また、
高等弁務官とその係官は信託統治領地域内において発見
された遺骨の日本送還に関する取極めの可能性を研究し
その研究の結果を、近いうちに、日本政府あて通知する
ことについても、高等弁務官は同意した。この送還は、
発見されたままの状態で、オ三節に述べられている物品
および集めえた情報とともに、箱づめにして、全遺骨に
ついて行なうものとされよう。

(14) 3月12日前日のノーウッド高等弁務官と厚生省援護
局長らとの会談において問題になったウォールアイ環礁
行きの交通機関の状況について調査の結果を米側から通
報してきた。それによるとウォールアイ環礁行きの最近

(26)

便は「4月6日グアム発でウォールアイ環礁に3日ない
し8日間滞在する。」ということである。

ウォールアイ環礁における収骨対象の島は11島であ
る。かねての計画によると天候に恵まれた場合において
最少限収骨のために11日間を必要とするにかかわらず
船便の最良の場合においても8日間の滞在をもってして
は収骨目的を果たすことができないのみならず、最悪の
場合には目的の3分の1にも及ばない成果となる虞もあ
るので今回はこれを断念し後日改めて実施することに決
定した。

(15) 昭和42年10月に計画した中部太平洋地域戦没者の
遺骨収集は、このようにしてウォールアイ環礁を割愛し、
サイパン、テニアン及びロタの三島について実施するこ
ととし、かつてその例をみない会計両年度にまたがる事
業が行なわれることとなったのである。

3月14日厚生省、外務省は派遣職員を次のとおり決定
し、3月23日出発させることとしたのである。

(27)

派遣員名表

編成	所 属		氏 名	備 考
田長	援護局調査課	課 長	横溝幸四郎	
田員	〃 調査課	課長補佐	石田 武雄	テニアン、サイパン
〃	〃 業務第1課	庶務班長	上治 周平	サイパン
〃	〃 審査課	第3審査係長	津田 義雄	テニアン、サイパン、ロタ
〃	外務省北米課	外務事務官	東原 茂男	サイパン、テニアン、ロタ

(16) 中部太平洋遺骨収集派遣団行動日程

中部太平洋遺骨収集実施計画、追悼式次第、及び派遣団から本省への連絡要領を別紙オ1ないしオ4のとおり定めた。

注：戦没者遺骨遺品取扱要領、派遣団往來対策指針、寄託品取扱要領、派遣団員の服務心得、及び現地採用通訳に対する要望事項等はフィリピン方面戦没者遺骨収集団派遣時決定したところによる。

(17) 派遣に携行させた物件等は、下記のとおりである。

(28)

携行品明細表

別紙オ5

事務用消耗品明細表

別紙オ6

携行薬品等品目表

別紙オ7

(18) 3月19日駐日米大使館アームストロング書記官から外務省北米局北米課長あて下記要旨の書簡が寄せられ、懸案の中部太平洋向け政府の遺骨収集派遣団は、マリアナ地域(サイパン、テニアン、ロタ)に向って出発することが確定したのである。

記

当大使館は「1948年3月23日にマリアナ諸島へ戦没者遺骨収集団を派遣する旨の日本政府の提案に同意したとの電報を太平洋信託統治領高等弁務官ノーウッドから受け取った。

信託統治領グアム連絡事務所は派遣団が3月24日にグアム空港に到着するものと了解している。日本政府派遣団を出迎える職員は派遣団に入域許可を与えることになっている。同職員は又そのときまでに派遣期間中の宿泊計画の概要を作成することになっ

(29)

ている。

注：出迎える職員の名は「ペレス」というと口頭
で付言された。

(30)

第2. 遺骨収集等実施の状況

1. 各島共通

派遣団は、3月23日(土)本邦を出発しグアム島経
由マリアナ諸島に入り、サイパン島において574柱
テニアン等において2393柱、ロタ島において55柱
合計8,822柱の戦没者の遺骨を収集するとともにそれ
ぞれの島において同島戦没者の追悼式を行ない、又グア
ム島において4月14日戦没者の遺骨2柱を收容し4月
17日本邦に帰還した。

細部の状況は、次のとおりである。

3月23日(土)22.50. 派遣団は、関係遺族等の見送り
裡にパンアメリカン801便にて東京国際空港発。

3月24日(日)04.05. (グアム時刻とし東京時刻+8
時間)グアム国際空港着エドワード、ツツイ氏の出迎
えを受ける。派遣団が本邦出発前に米側から連絡を受
けていた信託統治領グアム連絡事務所職員(ペレス氏
)の出迎えはなく、一方、若い税関吏の荷物検査が極

(31)

めて嚴重であつて派遣団一同しばし啞然たるものがあった。荷物検査が一段落したとき上役と思われる税関吏が派遣団の前に現われ「事情が解らなかつたので一般旅行者と同様に取り扱って申訳けなかつた。」との陳弁があつた。

幸いツツイ氏の斡旋によって H O O S E , A P T , R E N T A L M & M に投宿と決定、07.30 同宿舍着この間遂にペレス氏は空港に來なかつた。

これより先派遣団が税関検査を終わつて空港ビルの屋外に出たとき学生遺骨収集団として2月6日東京を出発した芥藤氏及び2月20日東京を出発した進藤氏が交互に派遣団を訪れ「われわれはテニアン島で戦没者の遺骨407柱を収集して30cm立方の箱9個に收め、そのうちの2個を持って05.00 発のパンアメリカン800便で帰国する。残りの7個はサイパン市長の農場に預託してあるから後を頼む。」との申入れがあつた。收骨地点等についての情報もえたかつたのであるが、僅か数分間のことであつて十分に意思を疏通することができなかつた。

(32)

13.30~17.00 日本人戦没者の碑を訪ねヌジゴの南太平洋戦没者慰霊協会の記念碑建立予定地付近の戦跡を訪ね、それぞれ戦没者の霊を弔つた。

3月25日(月)

10.00 信託統治領グアム連絡事務所に事務所長フィンリー氏を訪ね挨拶及びマリアナ地区への入域申請を行なう。許可書は15.00 交付されることを確認して辞去。12.00 グアム知事公邸にゲレロ知事を儀礼訪問、昼食をともにする。

15.00 信託統治領グアム連絡事務所を訪ね3月31日までを滞域期限とするマリアナ地区への入域許可書の交付を受け26日09.00 グアム発サイパン行トラスト、テリトリー航空500便の搭乗手続を終わる。

3月26日(火)

08.00 宿舍発 08.20 グアム国際空港着 09.00 グアム発TR 500便でロタ経由09.40(サイパン時刻とし、グアム時刻(-)1時間)サイパン空港着、信託統治領マリアナ支庁次長ダン、イ、アキモト氏の出迎

(33)

えを受け宿舎ローヤル、タガ、ホテルに入る。10.30
マリアナ支庁にコーマン支庁長を訪問、来島の挨拶を
行ない、引き続き支庁長室においてアキモト氏を始め
今次收骨作業の直接関係者である警務課長サブラン氏
同課次長ベナベンテ氏を交え收骨作業の日程、作業に
必要とする労務、車輛等について協議の結果、わが方
の作業計画は全面的に承認される。12.00 コーマン
支庁長の案内で信託統治領政庁にノーウッド高等弁務
官を儀礼訪問、その際高等弁務官は「先般東京、会談
で信託統治領内においては一般民間人による遺骨収集
をさせないとの合意に達したが、その後具体的に措置
したか。」との質問があったので、「明27日東京で全
国の主管課長会議があるのでその際指示することとな
っている。」と答えたところ彼は了解した。

14.00 ~ 17.00 間警務課長らの案内によって派遣
団員一同主としてサイパン島北部地区の遺骨の分布状
況等の調査を行なった。

3月27日(水)

08.00、マリアナ支庁を訪ね、ビザの延長(4月末日

(34)

まで)手続きをする。

10.00 ~ 17.00 間作業資材の調弁並びにトラベラ、
チエッフの換金等を行なう。

13.00 横溝田長から西村調査課長あて次の事項につ
いて国際電話する。

ア、現地官憲と作業計画について打ち合わせた結果に
ついて、

イ、学生遺骨収集団の行動について、

ウ、前渡金追送の場合のアドレスについて 19.00 ~

22.00 ローヤルタガ、ホテルにおいて日本側主催
のパーティーを開催し、現地の出席者はマリアナ支庁
長コーマン氏外遺骨収集作業に直接関係ある諸氏で
ある。

(35)

2 サイパン島の収骨及び行動

3月28日(木) 晴

石田、津田及び東京(外務省)団員のテニアン班は、サイパン空港を10.30発のマイクロネシアライン機にて出発した。団長及び上沼団員は09.30支庁にアキモト次長を訪問し「島内の遺骨情報は、支庁整務課がすべて掌握されている由であるが、念のため一般島民からも遺骨情報を提供されるよう、何らかの手段を考慮されたい」旨の申入れを行なった。これに対し、アキモト次長は、ユーマン支庁長の許可を得て、早速当地発刊の週刊新聞及びラジオにより遺骨情報を持っている者は、支庁もしくは警務課に申し出るよう広報すると確約した。(実際に実行していた) 09.40テニアン班の荷物のうち、麻袋が飛行機に乗せられないので、船便で運ぶことになり、警務課のトニー・バナベンテ次長(以下トニー氏と略称)の運転するジープでタナバク港に到り船長に依頼した後、チャチャの植物試験場に立寄った。昨日から

(36)

(37)

宿舎移動について交渉が思わしくないことを話すと
緒方氏はGOLF COURSE MOTEL（主人グレゴ
氏）を紹介してくれた。早速現場を見て依頼したと
ころOKということで即決、11.50 タガホテルから
MOTELに移動した。

グレゴ夫妻は純チャムロ族で親日家族で妻（マリ
アナ）は作年夏1か月程来日したことがあり、日本
語が話せ、何かについて好都合である。また、食事
も朝、昼（弁当）食はMOTELにお願い、食事につ
いては日本食に合うごとく気を配っていたことが
うかがわれた。夕食はGOLF場のレストラン（M
OTELから50m）で喫食することにした。

15.20 トニー氏の迎えを受け昨日視察できなか
ったサイパン島の中南東部（電信山、ラウラウカグマル峰及
びナフタン岬附近）の遺骨の状況について見聞した。

また、トニー氏とともに明日からの収集の細部計画
（人夫、装備等）を打合せした。

16.50 緒方氏の来訪があり、彼の言によると、
「サイパン島の収骨については、最小限3か月人夫
は毎日10～20人は必要であろう」と話していた。

(38)

3月29日（金）晴

いよいよ今日から作業開始、08.30 団長、上沼
団員（中島文彦氏も特別参加）他トニー氏の指揮す
る現住民人夫とともにジープ、トラックに分乗して
宿舎を出発する。途中サンロギーのゲート（これが
北は不発弾が多く現在人夫クの人で毎日処理して
いるが危険のため一般人は通過させない、いわゆる
米軍と警務の検問所）を通過して、マッピ岬海岸の
北部の洞窟2か所の収骨、1か所には誰か集めたの
か一部の骨を取まとめ木柱を建て香草を供えてあっ
た。人夫等は、恐怖して収集することをためらって
いる。団長は自ら軍手をはめ、脱帽し、合掌拝礼し
た後率先遺骨を収集した。それから後は人夫達も収
集にかかった。洞窟内は奥が深く、落石（戦後23
年も過ぎているので落石に埋れている。）を除くと
全く想像もしない程沢山のバラバラの遺骨が出てく
る、無我無中で収集した。ピッケルで掘り出してい
ると不発の手榴弾が出て来た。以後ピッケルでは掘
らないことにした。収集した遺骨は約450体

午後の前段は、マトイスとマッピのほゞ中間にあ

(39)

るもと野戦病院跡で約々〇〇体を収集した。周囲に鉄帽と防毒面の破片、ビール瓶、水筒等が散乱しており、観光道路から見えるので清掃して下山（日本人観光団のバスに出合い、観光団の人達は全員下車して遺骨に対し落涙しながら合掌していた。）

後段はマッピの北西部の山腹急斜面の収集で約150体を収集した。これら収集した遺骨は麻袋一杯づつに入水直して、もと米軍の倉庫であったかまぼこ型の建物の内部に丁重に仮安置して16.40帰路についた。

3月30日(土)晴

07.35宿舎出発、08.00ゲートで東原団員からテニアン^①の状況について団長に電話報告がある。午前中マッピ（マトイズ）東側の洞窟の収集。ここはジャングルの中にあり、ほとんど手つかずの状況で巨大な洞窟内に頭蓋骨30数箇あり、当時軍人、邦人が集団自決したと思われる。遺骨約500体を収集した。遺留品として仲松の水唱印のほか、櫛、軍歌集の紙切、青、赤インキ（当時のまま）、

(40)

子供の草履等があった。

午後の前段は、マッピ岬の手前（ゴンゴン岩）のしょう乳洞の収集に向う。途中はさみづ礁の突起で歩行が危険である。この洞窟も奥が深くライトの光では奥の方は見えない、ここでも相当数（約150体）の遺骨を収集した。

この洞窟の特質は、他の洞窟に比較して日常生活品の少ないこと、しかも落盤石が多いことである。

午後の後段は、明日の火葬場所の選定及び薪の準備をする。場所は検分の結果、サイパン島北西端のもと海軍飛行場の一角に決定した。（この場所はサイパン島では日本に最も近い位置である。）15.00頃かねて内親の遺骨を求めて渡島していた榊田女史一行が「連日捜索の結果家族の遺骨を収集持参した」といつて団長を訪れ非常に喜んでいった。遺骨のあった場所を図面で知らされ女性でよくもこの断崖のジャングル内で探し出した、全くこれこそ遺族の執念と感嘆した。明日の火葬に氏名判明遺骨として別個に火葬することを約束して受領した。

「氏名判明遺骨の本籍及び氏名」は別紙第8のとおり。

(41)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0096

現地では、週五日勤務制で土、日曜日は休務のため人夫はきたがらない。平日の5割増でトニー氏の説得によりようやく所要人夫を集めた。

夕食後中島氏訪問、雑談10分で帰る。

3月31日(日)晴

07.45宿舎出発、08.20火葬場着、火葬準備開始、遺骨を仮安置所から持参して薪約1m積重ねた上に鉄板を乗せその上に遺骨をならべ灯油1缶(18ℓ)を振りかけ、線香、ローソク、ウィスキー等を供え、団員人夫整列し団長は脱帽、合掌、拝礼の後点火した。これより先サイパン市長夫人、柳田女史一行、その他在日日本人数名が生花を供え参列した。また、火葬にあたっては風の方角、周囲の環境等充分考慮した。(火炎は北(日本)に向って燃えたことは団員には感ずるところがあった。)点火直後50m程離れたところで火葬の状況を見守ったが、カノ国でもあり失敗した。下積の薪は十分だったが、鉄板遺骨の上にさらに薪を積重ねなかったことが原因とわかった。明日午前の前段焼き直すことにした。帰る

(42)

とき人夫の古老が「佛様が余りに可愛想だから一晩中お守りいたしますようか」といったが好意を謝し遠慮してもらった。16.00早仕舞して29日から31日までの人夫賃及び自動車賃を支払った。

夜柳田女史一行の招待あり、22.50帰宿した。

なお、仮名判名遺骨は(別紙1)のとおりである。

4月1日(月)晴

07.35宿舎出発、途中自動車に給油等して08.40火葬場に着く。二組に分れ、団長は人夫数名を指揮して火葬のやり直しを実施する。柳田女史一行も骨上げに参加し、一部をそれぞれ記名の白布袋に納骨して残りは残骨として他の分に混入し焼直しする。

上治団員は他の人夫とともにマッピ嶺北部のタコの木ジャングル地帯の収集(約350体)

午後の前段は、午前に引続きタコの木ジャングル地帯の収集(約300体)波打際でも大腿骨10数本(約10体)収集した。

後段は、マッピ山北壁のパナテル道路から左へ入った洞窟の収集(約140体)帰路大腿骨3本(3体)を収集した。収集した遺骨は麻袋一杯づつに入れて火葬場脇の樹蔭に仮安置した。

(43)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0097

4月2日(火)晴

団長はテナンの遺骨収集及び追悼式に参列の予定だったが、テナン班の石田団員から支庁気付、団長あて電報報告あり、これをトニー氏が伝えた。その内容は「作業は終了した。本日13,000サイパンに帰還する」とのことでテナン出張を中止した。

午前中はマッピ山麓(海岸洞窟の南側)の収集(約300体)午後団長は、テナン班出迎えのため下山する。15,000飛行機欠航で山に帰り、上治団員に合流する。

上治団員はマッピ西海岸の洞窟の収集(約340体)遺品貨幣数枚、認識票2枚、時計1個あり。

また、15,000頃コマン支庁長及び秘書の巡視あり。(火葬の状況をノーウット高等弁務官が視察する下検分とわかった。)

4月3日(水)晴

団長はテナン班の出迎え、ならびに事務打合せのため入山せず、午前中上治団員とトニー氏及び人夫は午前中はマトイス原野の収集(約100体)

(44)

午後はマッピのもと野戦病院北側の断崖下ジャングル地帯の収集(約250体)

一方団長は、テナン班(石田、津田団員)と飛行場で合流して支庁にアキモト次長と面接、今後のことについて打合せをする。またアメリカンバンクサイパン支店で新年度追加資金を引出す。

夕食にテナンカンから同行したカマチヨと会食する。団員4名揃って賑かになった。

電報第一信を発信する。電文は下記のとおりである。

記

援護局長宛

本文「テナン収骨終る。約2000サイパン現在
まで収骨約2000。資金2593.1ドル受領、
皆元気。横溝」

4月4日(木)晴

07,40宿舍出発、途中自動車修理工場で自動車のバッテリー取替え、08,40マッピ山麓に着く、団員も4人となったので二個班に分れて行動すること

(45)

にした。午前中石田、津田団員班はマッピ山 洞窟
の収集（約 100 体）

団長、上治団員は不発弾処理のため組長の応援誘導
を得てマッピ山西側の洞窟の収骨、入口は人／人が
ようやく入れる程狭く入って見ると畳 100 畳敷程の平
地で遺骨のほか手榴弾の不発弾が 20 個以上、その
他陸軍のものと思われる装具が散乱していた収集遺
骨は約 150 体、遺品万年筆 1 本。

午後は、石田、津田団員の班は、タナパク高地の
収集人夫の話によると、この山の砲兵部隊はほまれ
部隊といった実に勇敢な部隊で、サイパン沖のアメ
リカ戦艦に大損害を与え、最後までよく戦ったと
言っていた。収骨数も多かった（約 300 体）。団長
上治団員の班は、午前中の洞窟を再収集（約 100 体）
して後半タナパクの石田、津田団員班に合流した。

夕食後、後半の遺骨収集計画について再検討する。

4月5日（金）晴

団長は後半の全般の計画及び関係機関等の交渉の
ため午前中残泊する、他の3人の団員は、二班に分

（46）

れ、石田、津田団員班はマッピ岬の東海岸の洞窟、
パナテルガン及び月見島付近の収集（約 350 体）
する。

上治団員の班は、ゲイトの北方、マトイス南方の
マッピ山麓の収集午後団長合流して収集（約 250 体）
する。

4月6日（土）晴

団長は昨夜から腹痛のため宿舎に引籠る。他の団
員3名は二班に分れ、石田、津田団員班は、午前中
島南部のアギーガン、ナフタン、アスリート方面の
収集に向う。この方面は戦争中に米軍が最初に上陸
し飛行場（B-29の基地）として整地した地域であ
る。ナフタンにおいて 50 体収骨。午後はマッピ山
北壁の収集を行ない約 80 体を収集した。

上治団員は人夫数名を指揮し、明日の火葬準備を
する。前回の失敗にかんがみ、こんどは鉄板を下に
並べてその上に薪（枯木及び生木のなるべく太いも
の）を 1m の高さに積み重ね上面を平らにして遺骨
を並べて、さらに薪を約 1m 積み重ねて万全を期した。

（47）

16.00 石田、津田団員の班と合流して帰宿した。

4月7日(日) 晴

第二回目の火葬日で 08.40、団員3名(団長は腹痛のため引籠り)マツビの現場に到着、再点検をして灯油2缶(15L)を一面に振りかけ、正面の台石に線香、ローソク、ウィスキーを供え、全員整列し石田団員脱帽、合掌拝礼後 09.24点火した。今日は順調に火の回りもよく成功した。中央の薪の上においた鉄かぶりが燃えるに従って自然に線香、ローソク、ウィスキーを供えた台石の上に納まったことも偶然とはいえ不思議に思われた。

予め連絡のあったとおり 10.00 ノーウッド高等弁務官、コーマン支庁長他政府要人数名の参列があり、石田団員が応待した。また午後サイパン市長夫人他数人の婦人が生花、線香等の供物をもって拝礼された。

15.30 帰宿して、4月1日から4月7日までの人夫賃、自動車賃をトニー氏に支払った。

16.00 からススベの日本人墓地の視察に出かけ

(48)

た。墓地は草ぼうぼうと荒れ果てていた、標柱も倒れたものもあり、このままの状態では数年もすればわからなくなるのではないかと心痛する。

また、ススベ岬付近に 10 勇士(戦争中壱機塔乗員)の碑を探したが見当たらず、現地の古たに聞けば、あるはずと言っていたので、2時間近くも探したが一面のジャングルで探し求めることができなかった。

団長の腹痛止まず医師の往診を受ける。

4月9日(月) 晴後曇

津田団員 08.30 ロタに向け出発する。(中島氏同行する。)団長は昨日よりやや良好のようであるが引き続き引籠る。

08.30 石田、上治団員は二班に分れ、午前中は上治団員はサイパン島中央部の最高タポッチヨ山の北壁に行動し遺骨約 250 体を収集した。

石田班は、サイパン島東海岸のマリン、タンク、決り、チャチャ方面の収集に向ったが、この方面は私有地として耕作され遺骨は無かった。

(49)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0100

午後は、合流してドンニーのもと海軍野戦病院跡に行った。ここは四方断崖に囲まれた谷間で四方に洞窟があり、薬瓶等が散乱していた遺体も土中、石の下から沢山（約350体）収集した。人夫の話では、終戦後ここで養豚60頭やったが薬品のためか全部死滅したと話していた。

遺骨収集以来毎日好天気に恵まれ実施計画のとおりを実施していたが、今日からだんだん天候が悪くなり、台風発生の情報あり、明日からの作業が心配となる。

電報亦二信を発信する。電文は下記のとおりである。

記

援護局長宛

1. 7日ノーウッド束場のもとに亦二回火葬を行った。
2. サイパンの収骨累計約5,000
3. 8日津田予定どおり口夕に立つた

横溝

夜二世の小暮オテイと称する中年婦人か母（リサ）のことについて戸籍謄本等持参、石田団員これに応待する。

(50)

4月9日（木）風強く曇時々スコール

団長の病状回復に向いうつあるも、休養する。

午前中上治団員は、軍艦島を収集する予定であったが、波が高く危険のため中止。予定を変更して石田団員とともに三角山（地獄谷）の収集に向う。険しい斜面に遺骨は野曝らしでジャングルの間に見受けられる。山は南、東、北の三面になり洞窟は小さいが行くところ遺骨あり約400体を収集する。

午後は、東北のカラベラ地区収集ジャングルの中に大洞窟あり奥底はライトの光がとどかない無限の底のようだ、しかし誰が来たか香筆を供えてあった。この付近で約100体を収集した。遺当岳に時計にしばらくつけた認識票1枚もあった。

なお、認識票の番号等は別紙4のとおり。

夕食にコーマン支庁長夫妻の招宴に団長、石田、上治団員出席する。

4月10日（金）風強く曇スコール激しくなる。

午前中、上治団員は人夫を指揮してマッピの火葬場に到り火葬の準備をする。（途中昨夜支庁長招待

(51)

のレストランの裏山から遺骨/体収集。)、团长、石田团员はススベの碑の前で行なう明日の追悼式の諸準備及び関係機関の打合せ、ならびに、象徴遺骨(日本へ持帰る遺骨)外の残骨を埋葬する穴掘。昭和28年日本政府が派遣した遺骨収集団が建立した「戦没日本人の碑」の右側を人夫を指揮して行なう。

火葬の準備は第2回と同じ方法で完了し風は可成強くスコールも激しい中で灯油/缶(18ℓ)を全面に振りかけて上治团员は線香、ローソク、ウィスキーを供え、合掌齊礼の後14.00点火する(オ3回目の火葬)14.15团长、石田团员合流する。風が強いため火の回りは早く成功であることを確認して15.40下山する。

学生がアニアンから持出した7箱の遺骨をサイパン市長の農場から秘かに受領する。

4月11日(木)暴風雨(ジン台風最大風速75m)

昨夜からだんだん風雨激しくなり、朝から暴風雨となる。トニー・人夫を激励して暴風雨の中をマッピ大葬場に骨上げ、残骨の処理に向う。象徴遺骨を一箱

(52)

に納め他は残骨としてチヤランカノアの碑の右横の昨日掘った場所へ埋葬する。なお、サイパン市長の農場から引取ったテニアン^①の遺骨も象徴遺骨を除き同様に埋葬した。人夫達は口々に「コンデションワシ^②」と言って恐怖心におののいている。团员、人夫/体となり作業を行ない11.00一応作業を終わり標柱(巾15cm厚10cm高200cm白ペンキ塗り木製)を建てて引上げる。この頃現住民はどくどくと自家用車で山の洞窟に避難して行く。暴風雨はいよいよ激しく14.00頃南灯は消え水道も出なくなる。窓には厚板で補強し、内部は真暗でどこからか雨が吹き込む。17.00頃宿舍の窓が隣の屋根の鉄板で殴られ硝子の破片部屋一面に散乱する。幸い負傷者なし。17.10頃急に無風状態(台風の目)となったが現地人は、まだ台風は残っていると恐怖している。18.00過ぎからこんど反対の方向(南)からの暴風雨となり、室内は水浸し、暗夜に水も食料もなく、隅の方で3人が小さくなって一夜を明かす。

サイパン島において収集した遺品は別紙第9のとおりであり、また収骨の場所を図示すれば別紙第

(53)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0102

10のとおりである。

4月12日(金) 風雨やや静かになる。

恐怖の一夜は明けた。08.00 トニー氏来訪。昨日の台風でチャレンカノアは全滅とか11.00から盛大に行なう予定であった追悼式も出来そうにないので12.00にすることに申し合わせる。12.00まだ小雨の降る中で碑の前に祭壇を設け、日本から持参の花輪、供物品を供え、田長、石田、上治田員の他トニー氏他数名及び通行中の人達10数名でささやかな追悼式を行なう。10分で終了する。追悼の辞は別紙第11のとおり(通行中の一婦人が生花を供えてくれた。)その後傍の教会の神父が従者数人を従え祈りをあげてくれたのでせめても心安まった。

4月8日から4月12日までの人夫賃を支払った。関係機関の挨拶もできないのでコーマン支隊長だけ挨拶した。

(54)

4月13日(土) 薄曇

14日のサイパンーグアムの飛行機の予約が取れないので予定を1日繰上げて予め本日予約してあったので荷造り完了サイパン飛行場に09.00到着早速手続に行くと、1昨日の台風のため予約は認めない、先着申込順序の受付で本日はもう乗れない。トニー氏が万端交渉してくれたが駄目だった。

津田固真(中島氏同道)がロタから帰還し合流する。明日の飛行便を予約してタガホテルに交渉(一般ツーリストは泊めない)して一泊することに決めた。タガホテルでこの度の遺骨収集の成果等について打合せを行なった。

(55)

3. テニアン島の収骨及び行動

3月28日 石田、津田、東原の各団員は、マイクロネシア、エアー、ライン機でサイパン空港を1000出発し、数分にしてテニアン空港に到着。マリアナ支庁テニアン出張所長レオン、テ、カマチヨ（島民で日本語が話せる。）等の出迎えを受けた。出張所長は「あなた方は、日本の学生進藤君から遺骨の所在を記入した地図を受取ったか。」と質問したので、「彼等とはグアム空港ですれ違った際、数分話を交したのみで、地図は受取りなかった。」と答えた。

出張所長の運転するジープにより、テニアンホテルにおいて宿泊手続きを終えた後、出張所に至り政府関係者（出張所長、警察関係及び業務関係責任者の計3名に過ぎない。）に挨拶し、団への協力要請及び簡単な打合せを行なった。その際出張所長から「進藤君は、あなた方のグループではないのか」と質問があり、「彼等は日本政府の遺骨収集派遣団員ではない、したがって、吾々のグループではない」と答えたところ複雑な面持であった。

(56)

(57)

終わってテニアン神社跡及び旧日本人火葬場を視察した。テニアン神社跡には、島居及び石燈籠の屋根一対が、わずかに往時の面影を止めており、島居の下に茨城県知事等の石碑、南太平洋戦没者慰霊協会の木碑及びコンクリート製洋式棺があつて、昭和28年に日本政府が建てた石碑は見当らなかった。

洋式棺(島民の屋敷による遺骨2柱が収納されていた。)は、出張所長の説明によれば、同人と警察関係責任者アントニオ・エス、ホルハ(母は島民、父は沖縄出身者)の両名が私費を投じて作成(その際茨城県知事等の石碑の台も作成)したもので、高等弁務官の布告により、一般人は遺骨に触れることが許されないので、日本人巡拝者が来島した際、島内の代表遺骨として礼拝の便に供するためのものであるという。

午後警察関係責任者の第ハアギン、エス、ホルハ(玉碎時テニアン在島、終戦後沖縄で中学校を卒業し再来島、島民は島袋三郎とも呼んでいる。)の案内により、出張所長とともにマルボ井戸南方の断崖く

(58)

別紙第12のオノ現場以下オ何現場とあるのは別紙オノ2を示す。)に至り附近一帯を踏査したが、ましまつた遺骨は見当らなかった。三郎氏は、同地に300以上の遺骨が集中してあつた、それをここ月前に再確認したといい、直ちに最寄の農場主ブルノー・トレス氏を訪ね出張所長とともに尋問した結果、同現場に日本人学生が立入ったことを確認したが、遺骨の搬出については、手懸りが得られなかった模様である。帰途出張所長は、「進藤達は今来島にあたり、日本政府遺骨収集派遣団の作業を容易にするために先行した。」旨申立てたので、私は彼等を信頼して、遺骨に触れないよう申し聞かせその行動を監視しなかつた。彼等は私をだましたのか。」と悲痛な面持で語つた。

夜ホテルに現地関係者(政府関係者、村長、議長、議員及び有力者計9名)を招き遺骨収集について協力を要請し、懇談した。その際、昭和28年に日本政府が建てた石碑について質したところ、建設地一帯は米軍がブルトーザーをもつて整地したので、

(59)

その際いずこかに埋めたものと思われ、テニアン
の恥と考え極力捜したが発見できなかった旨説明があ
った。

3月27日 1948年当時米軍がブルトナーをも
って整地作業を行なった際、発見した遺骨を1か所
に集めたというマルメ、クルス氏の案内によりカロ
リナス東北部台上(オヌ現場)に至る。一帯は雑草
と野生化した甘蔗によって覆われていたが、案内人
は目標とする空地を直線的に案内した。しかし、そ
こには骨片もなく、三郎氏は、昨日に続く奇怪なこ
とという。

同現場東方のジャングル内(オヌ現場)に入り
一帯を踏査収骨し、マルメ、クルス氏が過去に発見し
た遺骨を収納してあるという旧南興農場の防空壕(オ
ヌ現場)に赴いたが、コンクリートが折重って崩
れており施す術もなかった。次いで午後の飛行機に
よりサイパンに向う東原田員を送るため、幹線道路
を進みカロリナス西南部(オヌ現場)に至り、附近
の収骨を終ったところ、ジープで出迎えた出張所

(60)

長と出合い、東原田員と別れる。

午後サバネタバス南部(オヌ現場)に至り収骨の
後、多数の遺骨が散乱しているという、同現場の東
方に迂回し、ジャングル内(オヌ現場)をライオン
岩を背後にし、相当の範囲にわたって踏査したが予
期の成果は得られなかった。続いて島の中部及び北
部を視察のため、旧南興鉄道オノ分岐点、オノ農場
事務所、サバネタバス入口を至て東側幹線道路に出
て北上し、ハゴイの飛行場(オヌ現場)から反転し、
西側幹線道路を南下して帰途についた。

視察の結果、島の中、北部は相当程度整地されて
おり、同行の作業員で遺骨があることを知る者がな
いところから、収骨はカロリナスを中心とする南部
地区に限定すべきことを確認す。ハゴイの飛行場は
使用されていないため人影もなく、滑走路以外はタ
ガントガンの木で覆われ、その一隅に横穴式鉄筋コ
ンクリートの堅固な構造にかかわらず、砲爆毒のた
めに破壊された日本軍の弾薬庫及び燃料庫があり、
僅かな距離を隔てた滑走路の側に米軍が建てた広島

(61)

長崎の原爆塔載記念碑があつて、奇妙に同居していた。

夜出張所長が来訪し「あなた方は収骨成果について日本政府に電報報告するであろう。その結果、日本政府は成果の掌がらない原因は学生の行動にあり、それはテニアン政府機関が果たすべき責任を果たさなかつたからであると抗議して来るに違いない。そうすれば私は公取から追放される。私は学生の行動につき援助した者を徹底的に追及し、サイパンの上司に報告した後、日本に赴き不法行為の学生に対し必要な措置を構ずる覚悟である。」旨述べたので、日本政府が日本人の海外における不法行為を理由とし、外国政府に抗議するとは思えない、冷静なる判断と慎重なる言動を期待する旨要望した。

3月30日 フィリップ、シ、メンデオラ議員が奉仕したいと作業に参加する。案内人三郎氏は、一昨夜以来島民を訪ね学生の行動を調査し、遺骨情報を聴取した模様で「今日から学生の行かない遺骨の沢山ある所へ案内する。」という。カロリナス東南部の断

(62)

崖（オタ現場）に至れば、果せる哉下方に遺骨の散乱する洞窟が見える。岩層は火焰放射によるものが黒く焼けてもろく危険と思わせたが、ザイルを用い崖を下り、遺骨を南京袋に収め崖上に吊上げる。次いで西南方の断崖（オノ現場）に至り、ザイルにより洞窟に下りる。主洞窟は無数の小洞窟に接続し、散乱遺骨のため足の踏場もない。収骨を終えた際白鳩がノ羽頭と近くに舞下りてなかなか去らず吾々に何事か語りかけるようであった。続いて同現場の西南方に接続する断崖（オノ現場）に至れば、またまた下方に遺骨の散乱する洞窟が見える。地理上収骨したならば崖下に吊下げることが得策とも推定できるので、一部の作業員をトラックにより下方に迂回させ洞窟内に下りる。洞窟は深く南側一部を除き闇黒に閉され、懐中電灯の光は闇に吸い取られるようで延びない。遺骨が密集してあるのは火焰放射毒により攻撃された故と思われ、聴診器や注射器等が見受けられたところから軍医官の配置されていた野戦病院か大隊本部と推定される。崖下に回った作業員

(63)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0107

は、深いジャングルを切り開き峰に悩まされながら崖の根に辿り着いた模様であるが、崖が急峻のため洞窟に到着したのはノ名に過ぎなかった。そのようなことから崖を吊上げ収骨を終わり帰途についた。

出張所長から、日本政府の遺骨収集に関しノア。臨時村議会が開催されるので、出席されたい旨の連絡があったので、石田、津田両団員が出席した。出席者は議長を含む議員5名、村長、出張所長及び警察関係責任者であつて、ヒラリオ、エフ、デアス議長は、警察関係者が出席していることは異例であつて、遺骨に関し調査の要があるからであると説明した。

議長開会宣言し、団員を紹介、出張所長が発言を求め、日本政府の遺骨収集に協力すべきことを議会に要請した後、議長の求めにより石田団員が作業予定を説明し、協力を要請を行なつた後、所要の回答を行なつたが、その主なものは、次のとおりであつた。

(議長) 作業は短期に過ぎると思うが、延長でき

ないか。

(石田団員) 短期に過ぎると判断すべき資料がない、遺骨情報の提供があれば検討する。

(ハリー、エル、クルス議員) 日本人遺骨の搬送は、日本国民全員の義務であると考えて、国民の中には、遺族も居るのであるから、希望する日本人が来島し、遺骨収集ができるよう、日本政府は許可するように希望する。(注)クルス議員は、日本人学生を自宅に宿泊させたという。

(石田団員) 希望意見は日本政府に報告するが、日本国民全員の義務は即ち日本政府の義務でもある。日本政府は、戦没軍人軍属の使用者としての義務を負うものと考えて、そのようなことから、日本政府は吾々を派遣したのである。遺骨は本来遺族に帰属すべきものと考えて、収骨の対象となる遺骨は、殆んどその氏名が確認できない、そのような不特定遺骨を単に日本人である故をもつて収集することは、日本の国内法に照らして問題があると考えてる。

(クルス議員) 了解した、前発言を取消す。

(議長) 明日曜日朝教会に全島民が集まるので、
遺骨に関する情報を聴取し、正午までに本張所
至由提供する。

(石田団員) 情報は地奥毎に集約し、吾々が収骨
した地奥のものを除き、学生の行動した地奥の
ものを区分し、現認の有無及び現認の時期を明
らかにし、最近現認した以外のものについては
費用を出すから再確認させ整理のうえ提供願
いたい。

(議長) 要望のとおり調査のうえ整理し、1400
までに提供する。

3月31日 メンデオラ議員が引き籠り参加し、新た
にイシウス、マツモト氏(朝鮮出身者、農家)が参
加する。カロリナス西部の断崖に至り、16メー
ルのザイルス本をつなぎ合せ辛うじて達する洞窟の
収骨を終り、西方のジャングルを至て洞窟(オ13現
場)に至る。洞窟内には無数の砲弾が残されている
ところから、野砲陣地と推定される。終戦後立入つ

(66)

た者があるらしく非鉄金属は全く見当らなかった。
同現場の収骨を終え議長から遺骨情報の提供を受け
るため、作業員には火葬場所と定めた旧日本人火葬
場の伐木清掃を命じ両団員は出張所長を訪ねる。

提供された情報は、予期に反しノ名ノカ所に過ぎ
なかった。多くの人は山野の随所に遺骨が散乱して
いるといい、戦況から当然のこととされるのである
が、遺骨の所在を実際に知るのは、椰子蟹を捕り又
は非鉄金属を拾うため密かに断崖や洞窟を行動する
限られた一部の者に過ぎないことが確認された。

4月1日 セガンド、シ、カストロ 議員が自動車を
運転し作業に参加する。作業員を2組に分け、石田
組はカロリナス西部(オ14～オ16現場)及びカ
ロリナス東部(オ17現場)に至り収骨し、テニア
ン神社跡(オ18現場)の遺骨を収めた後火葬場に
至る。オ14～オ16現場には砲兵の戦列車1、輜
野砲1門があり周辺には多数の未使用の砲弾が散乱
している。今はタンガタンガのジャングルに囲まれ
ているが洞窟はテニアン滝(米軍が上陸を試みわが

(67)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0109

反響にあり後退した)方向に開口しており諸戦において活躍した砲兵陣地であつたことに間違いない。

津田組は、新情報提供者ベセンテ、シン氏を案内人とし、ライオン岩に近接するカロリナス東北端台上(オノノ現場)に至る。同現場は4年前の山火事のために道が開けたといい、洞窟の前方において案内人は約6か月葉莢を拾い散けたという。洞窟の中は5段階になり、各段は2メートル乃至6メートルの高低差があり、地下3段以下は暗黒に包まれ、冷気が感ぜられる。最も広いのは地下4段で、中央部において懐中電灯を照らしても光は四方の壁面に届かず、天井は藝術作品を思わせる鐘乳洞特有の石柱が垂れ、その所々に電線が張つてあるのは缶を吊り水滴を集めたもののようである。壁面は無数の小洞窟に接しており、岩を伝い細く水の流れる箇所があり、食器類が多数置いてあるところから、炊事場であつたに違いない。また、指揮官の居所にあてられたのか鉄木の板を敷いた小洞窟も見受けられた。懐中電灯の光を頼りにもつぱら頭蓋骨を含む大きな骨

(68)

の収容につとめ遺品に注意したところ、夜間攻撃に出て奪取して来たものか、アメリカ製の手榴弾、食器類及び電線等を多数見つけたが、氏名の確認できるものはなかった。なお、壁面に字の刻まれているのを認めたが、「必成ヲ期ス」及び「一同」とあつて、前一行及び中間一行は字が重ねて刻まれているため判読できなかった。

同現場の西南方ジヤングルに入り抜け出たところ、人工の陣地とも思える岩間の小道路(オスノ現場)に至る。道路は随所に小洞窟と接し崖に削り、はるかに東に延びて、その東端は視界が展け真北下方にライオン岩の頂上、その東方にマルボ岬及び海上はるかにサイパン島が見え、南西方にカステーヨ岬を見ることが出来る。同現場の収容を終え火葬場に至り、石田組と合流し、戦時中使用したカマドノ基ど、その横の空地を利用して12.00火葬を開始した。島民は火葬の経験がないようであるが、死者の壺を弔う習慣にしたがつて、各自ビールビンを手に持ち、夜が更けても現場を去らなかつた。

(69)

×月×日 早朝火葬場に至り象徴遺骨を収め、残骨を
テニアン神社跡の洋式棺に納めるとともに祭歌を歌
け花を飾り供物皿を調達し、島民の参加を得て、
〇〇追悼式を開始した。短かい式ではあったが島民
は感銘を覚えた模様である、追悼の辞は別紙オノ
のとおりである。引き継ぎ神父の先導により深い祈
りを捧げていた。

13.00 発の飛行機によりサイパンに向うため残
骨を収めた洋式棺の密閉等埋葬に関する処理を出張
所長に委託し、諸般完済の後空港に至る。

空港には見送りのため島の有力者全員が集まり、
サイパンからの飛行機を待機したが、所定の時刻に
到着せず、2時間程度の遅着は珍らしくないとのこ
とであったが、15.30頃エンジン故障のため飛来
せずとの連絡を受けホテルに引返す。

×月×日 飛行機の予定については、決定次第連絡す
る旨通知を受けていたが、その後何の連絡もなく、
08.30頃飛行音が聞えた直後メンデオウ義員が自
動車を運転しホテルに乗り空港に送ってくれた。

(70)

空港には、飛行機が到着しており、中島文彦氏の
顔が見えた。用務のためサイパンに赴く、出張所長
等が同乗する機に遺骨を捧持し、09.30 テニアン
空港発、団長、マリアナ支庁長アキモト氏等の出迎
えを受けサイパン空港着、サイパン班に合流した。

×. ロタ島の収骨及び行動

×月×日 津田団員は、トラスト・テレトリ航空便
で、サイパン空港を10.00 出発し、10.30 ロタ
空港に到着した。同機にはロタの政府関係施設を視
察するマリアナ支庁長コーマン氏が同乗し、中島文
彦氏の顔も見えた。

空港において、支庁長を出迎えたマリアナ支庁ロ
タ出張所長ブルデシオ、テ、マグローニア氏(島
民で日本語ができない。)と簡単な挨拶を交し、先行
した東原団員の手配により迎えに出たというロタホ
テルの主人ホワン、デアス氏の車で島の北部シナパ
ールの空港から島民が集中居住する島の南端ソニン
にあるロタホテルに赴いた。空港には、たまたま

(71)

×月×日 早朝火葬場に至り象徴遺骨を収め、残骨を
テニアン神社跡の洋式棺に納めるとともに祭段を設
け花を飾り供物品を調達し、島民の参加を得て、
〇〇追悼式を開始した。短かい式ではあったが島民
は感銘を覚えた模様である。追悼の辞は別紙オノ
のとおりである。引き継ぎ神父の先導により深い祈
りを捧げていた。

13.00 発の飛行機によりサイパンに向うため残
骨を収めた洋式棺の密閉等埋葬に関する処理を出張
所長に委託し、諸般完済の後空港に至る。

空港には見送りのため島の有力者全員が集まり、
サイパンからの飛行機を待機したが、所定の時刻に
到着せず、2時間程度の延着は珍らしくないとのこ
とであったが、15.30頃エンジン故障のため飛来
せずとの連絡を受けホテルに引返す。

×月×日 飛行機の予定については、決定次第連絡す
る旨通知を受けていたが、その後何の連絡もなく、
08.30頃飛行音が聞えた直後メンデオウ議員が自
動車を運転しホテルに乗り空港に送ってくれた。

(70)

空港には、飛行機が到着しており、中島文彦氏の
顔が見えた。用務のためサイパンに赴く、出張所長
等が同乗する機に遺骨を捧持し、09.30 テニアン
空港発、団長、マリアナ支庁長アキモト氏等の出迎
えを受けサイパン空港着、サイパン班に合流した。

× ロタ島の収骨及び行動

×月×日 津田団員は、トラスト・テレトリー航空機
で、サイパン空港を10.00出発し、10.30 ロタ
空港に到着した。同機にはロタの政府関係施設を視
察するマリアナ支庁長コーマン氏が同乗し、中島文
彦氏の顔も見えた。

空港において、支庁長を出迎えたマリアナ支庁ロ
タ出張所長ブルデンシオ、テ、マグローニア氏(島
民で日本語ができない。)と簡単な挨拶を交し、先行
した東原団員の手配により迎えに出たというロタホ
テルの主人ホワン、デアス氏の車で島の北部シナパ
ールの空港から島民が集中居住する島の南端ソソ
ンにあるロタホテルに赴いた。空港には、たまたま

(71)

同島滞在中の東海大学(探検会)の学生々名が出迎えてくれ、先住民族の遺跡調査を行なっているという島の中部において別れた。

午後出張所に至り、ノニ日登のサイパン行き飛行機の搭乗予約を行ない、居合せた村長アントニオ、アタリック氏の通訳により出張所長に挨拶し、作業予定を説明するとともに協力を要請した。次いで出張所長の命令によつて東原団員の墓地視察を案内し、引き籠り基地の調査を行なっているという警察官グレゴリオ、マラテイタ氏の案内により、ホテルの主人が運転する自動車により、中型車が行動できる範囲にある墓地の視察を行なった。

ソンソンから飛行場に至る中間タルカにあるスカ所の基地は、雑草の中に一方は花、他の一方は竹が見えるのみである。案内者は、埋葬の当時、日本兵が花ス株と竹ノ本を植えたもので、日本兵が通過する都度墓に向つて敬礼していたから、偉い人のものに違いないという。しかし、花も竹もそれがス株であり、ノ本であったとは想像もできない程に繁茂し、

(72)

墓を思わせるものは何もなかった。

次いで、飛行場のはるか東方海に見える高地に至る。地図によれば、パリエを遠く西北方に離れているのであるが、パリエ地区の牧場であるという。一帯は広々と雑草に覆われ、黒い大きなロタ牛の群れが影画のように見えるのみである。ここにも一見して墓地を認識させるものはないが、草の根元所々にビールビンが、底を上にし、半は地中に埋めてあるのが見える。それが埋葬個所を示すものであり、埋葬当時氏名を記した木標が建てられたというが、朽ち果てたものであろう、僅かに土が陥没し、土葬を思わせるに過ぎない。

出張所長の助言により、夜ホテルに島の有力者全員の参集を求め、作業計画及び予定を説明するとともに協力を要請した。全員日本語を解し、交々に協力を誓った。その際一同を代表し、長老トマス、メンデオラ氏が、日本と南洋とは切っても切れない関係にある。日本人は淋しく、暑い南洋に来て開発してくれた。また、戦争のためとはいえ、この島で多

(73)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0113

くの日本人が死亡した、遺骨収集は、日本政府が当然に行なうことで、吾々は喜んで力の限り協力する。しかし、遺骨を全部持帰られたならば、日本との関係が切れてしまう。吾々は次の世代の者に日本との関係を明示できるものを残したいと念願している。そのために若干の分骨をお願いできるものであれば、ロタ神社跡に埋葬し、追悼式の日をロタ島の記念日として祀りたい旨の申出があつたので、持帰ることのできない残骨のできた場合、ロタ神社跡に埋葬するから適切な管理を願いたい旨答えた。

×月×日 東海大学の学生×名が他島に赴く予定のところ、船が延着する故をもつて奉仕したいといい作業に参加し、中島文彦氏も同行し、助言にあたってくれた。作業員は、村長、ホテルの主人等有力者のみで、遺骨を南京袋に収めることは、死者に対し失礼であろうといい、新しいボール箱を持参する者があり、負傷者の出る場合、分散した作業地の全部に自動車を設置する必要があるといい、ジープを持来る者があつた。

(74)

作業員を3組に分け、パリエ及びモーチヨン地区の墓地発掘のため各ノ組を先行させ、他のノ組とともにソソソソとテルノソの間際に海岸近く突出した断崖の下部窪地に至る。同地は、数年前に先住民族の遺跡発掘のため島内を巡回した神父(現在テニアン在住)が遺骨のあることを発見したというもので、東西スカ所から計り体分を収容した。同地附近は海軍部隊が配備されていたという。

次いで、西海岸を北上し、ジープ以外立入ることのできないモーチヨン地区ジャングル内の発掘墓地スカ所を巡回する。いずれも墓地を示すという焼坑が建ててあり、火葬の後灰を埋めたもののようで、少量の骨片を収める。続いて2組の作業員とともにパリエ墓地に至り、一部の者を同現場南側のジャングル内にあるという墓地発掘に向わせる。

パリエ墓地は、既に遷送された丸岡海軍中尉の遺骨を発掘した墓地であつて、周辺一帯は珊瑚礁の岩が数多く露出しているにかかわらず、埋葬個所のみ赤土である。陥没した個所を約50センチ掘れば必

(75)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0114

す遺骨が現われ、頭は例外なく北に向けられていて、ビールビンは、その頭頂部に立てられている。作業員は器具により骨を壊さないよう手で土を除き、頭部から順次足部に至る各部分を確認しながら収容する。中には空襲等によるものか、骨折の認められるものもあった。丸岡中尉発掘の箇所からは、少量の骨片と葉菜1個が出たに過ぎず、それを除き同現場から40体分を収納(時間の都合により、一部の発掘を翌日行なうこととする。)したが、氏名の確認できるものはなかった。

次いで一部の作業員を伴い南側ジャングル内に至る。同現場は、岩石多く発掘は困難を極め4体分を収納できたに過ぎず、亦ニ飛行場建設工事中であった海軍の設営隊の墓地であろうと聞く。

以上が所計44体分の遺骨は、ソンソン地区ロタ神社裏の戦争末期に野戦病院とされていたという神威洞(末次海軍大将の筆になる標識がある。)内に安置する。

4月10日 東海大学の学生及び中島氏が引き続き参

(76)

加する。赤島以来の強風ますます加わり、時に激しい降雨があつて、台風の接近を思わせるため、16日の火葬開始を目途とし、作業員の1組は薪を集め、他の2組は、昨日に薙きパリエ及びその南方ジャングル内の墓地を発掘整地し、余力あるときは、タルカ墓地を発掘整地の後すみやかに帰投するよう指示し、出発所に赴く。

出張所長と会談し、火葬に要する石油は市販されていないので、政府保管のものを必要量放出すること並びに東原団員の離島に際し、ロタ空港において政府関係者が、正当な理由を示すことなく搭乗を拒否したことは遺憾であり、今後そのようなことがないこと及び遺骨の機内持込みが保証されることを確認する。

火葬地は、当初ロタ神社跡を予定したが、民家近く強風のため適当でなく、旧日本人火葬場はジャングル化し道を開くに容易でないためソンソン東方オノ収骨地奥の崖の間で行なうことに決定する、作業員が帰投し、その報告によれば、パリエにおいて5

(77)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0115

体分、ジヤングル内において、体分を収め、タルカ地区の花と竹のある墓地は火葬後の残灰が埋葬されていたに過ぎなかったという。遺骨は累計54体分となり、小型トラック3台分の薪と10ガロンの石油をもつて、1500火葬を開始する。火は順調に回り、島民は「海行かば」続いて「君か代」を歌い現場を去ろうとしなかった。

20.00 ホテルに出張所長等政府関係者及び村長等主な協力者を招き謝辞を述べるとともに懇談する。参会者は11名であった。

4月11日 風雨ますます強くなり、朝火葬場に赴き象徴遺骨を収める。中央部に残り火があるため残骨の処理は後刻行うこととして引揚げたが、その直後本格的台風の前襲あり、島民は昨年10月の台風を正験しているため、自家防禦に懸命であり、追悼式の挙行は見込みなく天候の回復を待つこととする。

夕刻に至りサイパン、テニアン被害甚大のグアム放送が伝えられる。団員の安否が気づかれ今後の行動につき指示を求める要があるためサイパンに打

(78)

電を依頼したところ、現在のところ交信困難であるとのことであった。

4月12日 台風の名残りか風雨強し、朝出張所長を訪ね、追悼式は天候の回復が見込まれるので本日挙行する旨通知し、サイパンと交信が可能となり次々団員の安否とその行動予定を確認されたく、飛行再開をまつてサイパン又はグアムに向うこととなる。特別の事情による乗客の制限が行なわれるとしても、塔乗関係事務を担当する出張所が土曜、日曜日のため執務しないとしても希望する飛行機に塔乗できるよう措置されたい旨申し入れたところ、そのように措置する旨の確約を得た。

追悼式は、当初ロタ神社跡で行なう予定であったが、天候の回復が十分でないため教会に附属する円形屋根のある屋外集会所の借用を神父に申し入れ快諾得た。その際キリスト死亡を記念する宗教行事が1500から全信者集合のもとに教会において行なわれるので、それ以前に終了されるよう希望する旨の申出があったので、1300開始と決定し、村長

(79)

に通知するとともに東海大学の学生及び島民有志の協力により式場の準備を行ない、出張所長以下多数の参集を得て式を行なった。終了後神父の祈りがあり、島民が再び「海行かは」を歌った。

夕刻出張所長から飛行機の予定が決定した、グアムに行きたいならば明日、サイパンに行きたいならば明後日に搭乗させる旨の通知があつた。サイパンの状況不明でもあつて、同地に向う旨回答し、島民の宗教行事の終了をまつて残骨整理を行なうこととする。

4月13日 0800 出張所からサイパン向け飛行機が0830 出発する旨急電あり、飛行場まで20分を要することあつて、急ぎ荷物を梱包し、ホテルの主人とともに遺骨を捧持し、出張所に立寄り残骨処理のための人夫賃を手渡し、その処理を依頼した後、空港に急行して搭乗手続きに併せ辛うじて諸松を済ませロタ空港を出发する。サイパンの上空に達すれば、その惨状目を覆うばかりであり、安否を気付かった団長以下全団員の出迎えを受けサイパン空

(80)

港に到着し、本隊に合流した。

5. 各島共通

4月13日(土) 10.00サイパン空港に赴き14日17.00 サイパン発TR501便グアム行の搭乗手続を行ない午後は関係方面への挨拶を行なう、ローヤルタカ、ホテル宿泊

4月14日(日) 午前中ホテルにおいて会計事務等の整理等を行なう、15.20ホテル発17.45サイパン空港発19.30(グアム時刻としサイパン時刻+1時間)グアム国際空港着 HOUSE APT. RENTAL M&Mに投宿

21.00 次の電報を援護局長あて発信した

電 文

1. 三島の遺骨収集終わる、サイパン、5ククマ
テニアン 2.39.3 ロタ 55 合計 222
2. 11日夜の台風のためサイパン、テニアン被害甚大なるも団員無事
3. 14日グアムに移った、予定のとおり帰国しう

(81)

る見込、

22.00 太田光弘氏宅を訪問し同氏が通称零戦
付近から収骨してあつた遺骨2柱分を受領した。

4月15日(月) 11.00 パンアメリカン航空グア
ム営業所に行き17日05.00 グアム発東京行800
便の搭乗手続を行なう。

4月16日(火) 13.30 調査課長あて次の事項につ
いて国際電話する。

1. 収骨作業の総合成果について
2. 捧持遺骨の数量等について
3. 氏名判明の遺骨について
4. その他

17.00 グアム政府経済部長補佐フローレー氏を
訪問帰国の挨拶をする。

注: ゲレロ知事 日本出張 不在中

4月17日(水) 03.10 宿舎発05.00 グアム国

(82)

際空港発 パンアメリカン800 便に搭乗06.20
東京国際空港着タラップ下において遺骨を厚生大臣
に渡す、遺族等の出迎えを受ける 次いで記者会見
して遺骨収集の概要を説明する。

ホ3 信託統治領政府の協力と島民の感情

今回の遺骨収集は前述のごとく対米交渉の段階にお
いては若干の曲折があつたが 実施に際しては現地政
府筋の全面的協力のもとに行なわれたのである。すな
わち 派遣団が現地到着から同地を離れるまでの間連
日サイパン放送を通じ又新聞紙(週刊)を通じて日本
政府の遺骨収集派遣団が来島していること及び派遣団
の収骨作業を容易にするため遺骨の所在に関する情報
所持者は政府に届けであることを島民に要請し派遣団は
これらの情報によつて収骨作業を能率的に行なうこと
ができ、又高等弁務官は自らサイパン島におけるホ2
面目の茶毘の際は日曜日にもかかわらずマリアナ支庁
長らを帯同して現場を視察し派遣団を激励する等終始
派遣団の作業に配慮されるところがあつた。

(83)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

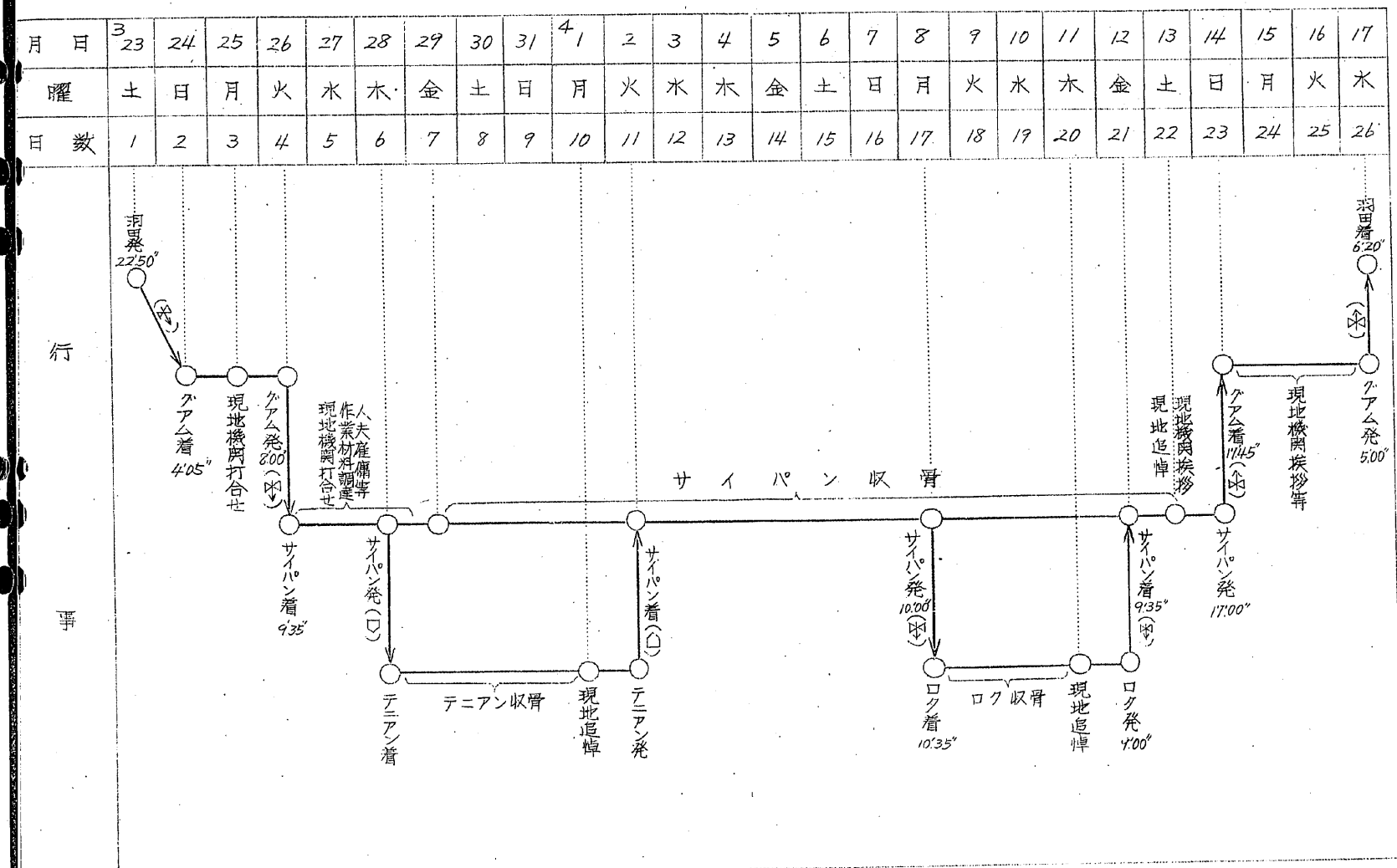
0118

又現地作業員として雇い入れた島民も日本の統治時代に覚えた日本語を操り熱心に収骨等に協力してくれたのである。

別紙第1

中部太平洋遺骨収集団行動日程表

(サイパン・ロク・デニアン)



(84)

(85)

RG'-0018

0120

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

別紙第2

中部太平洋遺骨収集実施計画 (サイパン島(共通事項を含む。)の部)
昭43.3.144

1 現地機関等と事前の打合せを密に行い、遺体の収容にあたっては全島を対象とするが、特にその重点を北部地区に指向するものとする。これにより北部地区について露出遺体の所在を明らかにするとともに、極力その全部の収容に努め、それ以外の地域についても余力をもつて露出遺体は勿論収埋葬直体の収容に努めるものとする。

2 派遣団の基地は、ガラバン附近に置くが事情により前進基地を設け、2組または3組に分れて実施する。

3 収容した遺体は、当該地域において適当と認める場所において火葬に附したる後、現地において追悼式を実施する。

区分 月曜日	実施作業	地区	人員			摘要
			通訳員	公人	多量	
3/23	派遣団出発	東京空港(22.50)				
24		グアム島着(4.05)				
25	現地機関挨拶及び打合せ	グアム島発(8.00)	4			エア・タフシーにより全島偵察
26	派遣団移動	着(9.35)				
27	現地機関挨拶及び打合せ	サイパン島				
28	偵察作業材料調達 人夫雇傭等					
29	遺体の収容 現地調査 遺体の火葬及び収骨	北部地区 (タナロフ、マダンサ、マッピ、 ハナテラ、ナルチザン、 カラベラ、タホホ)	2	1	1	1. 収容した遺体は一定場所集積して、ある程度まとまってから火葬にする。 (4回予定している。)
30				30		
31						
4/1						
2		中部地区 (ドンニ、チャチャラウ、 ラク、ハタマン、タボツ、 チヨ山附近)	4	2	20	
3						
4						
5						
6		南部地区 (アレオ、チャラン、ロリス、 ツッラ、チャラン、 アスコン、アギー、オヒ、 アム、ナブタン、 附近)	3	2	15	
7						
8						
9						
10						
11						
12						

13	土	22	現地 現地機	追悼 機員移	サイパン島 発(1700)	1	1	1	
14	日	23	派遣面	移動	着(1745)	5	1	1	
15	月	24	戦跡 慰霊		クラム島	1	1	1	
16	火	25	現地機 機員移		発(500)	2	2	2	
17	水	26	派遣面 帰国		東京港 着(6.20)				

備

考

(87)

中部太平洋遺骨収集実施計画										(テニアン島、ロタ島の部) 昭和43.3.14									
区分		島別		テニアン島				ロタ島											
方		1. 現地機関等に対する事前打合せを遂に行ない、遺体収容の重点を南部カロリナス台地一帯の洞窟、断崖等に指向し、当該地域を踏査して露出遺体発見につとめ、その全部を収容するものとする。 なお、前記の作業に支障のない範囲において、島内他地域についても踏査し、露出遺体の収容につとめるものとする。				1. 現地機関等に対する事前打合せを遂に行ない、遺体収容の重点を南部カロリナス台地一帯の洞窟、断崖等に指向し、当該地域を踏査して露出遺体発見につとめ、その全部を収容するものとする。 なお、前記の作業に支障のない範囲において、島内他地域についても踏査し、露出遺体の収容につとめるものとする。													
		2. 収容した遺体は、なるべく1カ所に集め、これを火葬に附した後、現地において追悼式を実施する。				2. 収容した遺体は、なるべく1カ所に集め、これを火葬に附した後、現地において追悼式を実施する。													
針		2. 収容した遺体は、なるべく1カ所に集め、これを火葬に附した後、現地において追悼式を実施する。				2. 収容した遺体は、なるべく1カ所に集め、これを火葬に附した後、現地において追悼式を実施する。													
		2. 収容した遺体は、なるべく1カ所に集め、これを火葬に附した後、現地において追悼式を実施する。				2. 収容した遺体は、なるべく1カ所に集め、これを火葬に附した後、現地において追悼式を実施する。													
実施要領		日	教	人数	器材	実施作業	地区	人員	器材	実施作業	地区	人員	器材						
		月	日	通訳	通訳	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		3	木	28	29	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		4	金	29	30	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		5	土	30	31	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		6	日	31	1	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		7	月	1	2	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		8	火	2	3	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		9	水	3	4	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		10	木	4	5	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		11	金	5	6	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		12	土	6	7	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
摘要		日	教	人数	器材	実施作業	地区	人員	器材	実施作業	地区	人員	器材						
		月	日	通訳	通訳	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		3	木	28	29	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		4	金	29	30	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		5	土	30	31	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		6	日	31	1	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		7	月	1	2	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		8	火	2	3	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		9	水	3	4	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		10	木	4	5	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		11	金	5	6	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					
		12	土	6	7	現地機関等に対する事前打合せ	サバン港(船便)	2	1	20	1	1	1	1					

別紙第3

日本人戦没者追悼式、式次第等

(追悼式次第)

一 開式の辞
一 黙とう (一分間)

司会者

一 追悼の辞 (1) 日本政府派遣団代表

一 献花 (1) 日本政府派遣団代表

(2) 来賓

一 閉式の辞

司会者

(式典の要領)

○ 進行係

「ただいまから式典を始めますから祭壇の前に、ご整列願います。」
(整列終了の時をみて)

○ 進行係

「ただいまから○○○○島日本人戦没者追悼式を挙行いたします。」

○ 進行係

「これから○○○○島日本人戦没者に黙とうを行ないます。」

「黙とう」(一分間)

「黙とうを終わります。」

○ 進行係

「追悼の辞」 「日本政府派遣団代表」

○ 進行係

「ただいまから花を捧げます。」

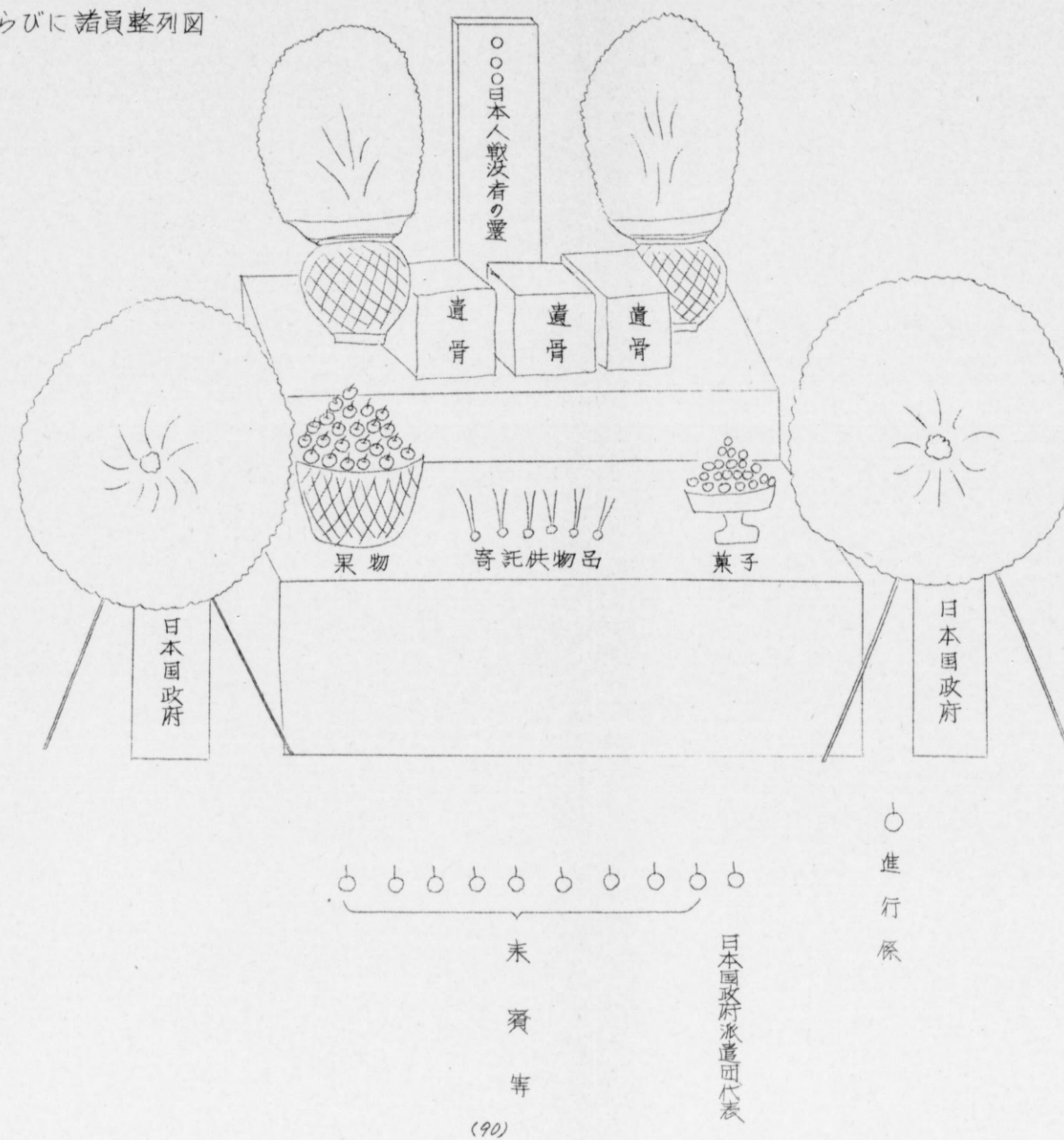
「日本政府派遣団代表」

「来賓」

○ 進行係

「これをもって○○○○島日本人戦没者の追悼式は、終了いたしました。」

追悼式場祭壇設営ならびに諸員整列図



派遣面から本省への連絡要領

1. 要 旨
- 派遣面から本省への連絡については、本省において派遣面の現況を、は種
でさるごとく面長から適時主要事項について報告する。

2 実施事項

報告先	報告時期	報告内容	報告手段等
本省	高等弁務官との打合せ終了時	左の打合せの結果及び作業計画について。	電報を原則とするが、報告の内容容により 501-2042 (調査課) を受信電話機として、つぎの時間(日本時間)に電話することがある。 月～金 10:00～15:00 土 10:00～11:00
	デニアン収骨終了時	デニアン及びサイパンの収骨状況について。	
	ロダ向け、サイパン発確定時	左の旨及びサイパンの収骨状況について。	
	ロダ収骨終了時	ロダ及びサイパンの収骨状況について。	
	サイパン追悼式終了時	サイパンの収骨状況について。	
	クアム向け、サイパン出発時	左の旨	
	クアム到着時	派遣面行動の総合及び帰国予定等について。	
本省 TEL 501-2042			電 話
備 考	1. 緊急のものについては随時報告する。		

(9/～92)

別表第5

遺骨収集派遣用携行品明細表

昭43. 3. 13

品目	区分	数量	単価	金額	備考
ピッケル		4	4,000	16,000	
ヘルメット		4	600	2,400	危害防止用
ニッコーライト		4	2,700	10,800	
懐中電灯		4	850	3,400	
" 用電池		20	50	1,000	
遺骨箱		15	200	3,000	
" 覆		15	200	3,000	
遺骨袋 (大)		30	270	8,100	白布製 30 ^{cm} × 40 ^{cm}
" (小)		100	120	12,000	10 ^{cm} × 15 ^{cm}
ビニール袋		30	160	4,800	20 ^{cm} × 30 ^{cm}
白布		20	110	2,200	
花輪		6	850	5,100	
ビニール風呂敷		20	70	1,400	90 ^{cm} × 90 ^{cm}
磁石		4	500	2,000	
温度計		2	200	400	
ザイル		4	500	2,000	
遺体収容袋		20			現地調達
ゴム手袋		4			
国旗 (日章旗)		2			

(93)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

RG'-0018

0128

別紙第6

遺骨収集派遣事務用消耗品明細表

昭43.3.13

品目	区分	規格	数量	備考
ノート			4冊	
マジックペン			4本	
マジックインキ		黒	4個	
〃		青	4個	
〃		赤	4個	
墨	汁		2缶	
毛筆		太	2本	
模造紙		100円	10枚	
セロテープ			2個	
綿テープ			2個	
荷札			50枚	
画鋏		1クロス入	3箱	
針	金	20号	30m	
鋼		太3mm 長10m	10本	
フィルム		白黒36枚	40本	
布テープ		赤、黄青	各13巻	

(94)

別紙第7

携行薬品等品目

品名	数量	摘要
ハサミ	3	
毛抜	3	
クレオソート丸	5	
オロナイン軟膏	5	
防虫クリーム(モスキト)	5	
ポンピリンキニーネ	5	
バイエルアスピリン	5	
新グレラン	5	
胃健錠	5	
ペニシリン軟膏	5	
ワカ末錠	5	
アンモニヤ水	3	
強カパンピタン	1	
ゼノール	3	
マーキロ液	3	
希ヨードチンキ	3	

(95)

RG'-0018

0129

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

品名	数量	摘要
ホータイ	5	
絆創膏	5	
ガーゼ	3	
消毒用アルコール	3	
ピリパン錠	5	
トラベルミン錠(ミラミン)	5	
オキシフル液	3	
逆性石けん	3	
DDT粉剤	5	
フマキラ	5	
蚊取り線香	5	
目薬	5	
ピンセット	3	
脱脂綿	3	

(96)

(別紙 8)

氏名判明遺骨の本籍及び氏名

本籍 沖縄県那覇市通当町

氏名 名城 栄子 (当時 19才)

本籍 広島県福山市大門町大門駅川

氏名 亀川 千恵世 (38才)

瑞穂 (10才)

宜穂 (2才)

豊紀恵 (8才)

鹿弘 (0才)

(お手紙さん) 豊津 雪子 (18才)

本籍 東京都八丈島榎立村

氏名 森下 清造 (50才)

きぬ (43才)

清三郎 (16才)

本籍 東京都小笠原

氏名 石野 秀二 (42才)

スズ子 (5才)

(97)

本籍 東京都小笠原

氏名 森 下 か ね (オ)
ヒロシ (オ)

本籍 愛知県名古屋市(以下不明)

氏名 陸軍軍曹 水 野

本籍 不 明

氏名 陸軍上等兵 オオツキ

以上ノ6名は 柿田武史一行の遺族が収集して、団に依託したものであって、水野軍曹、オオツキ上等兵は、森下清造氏一家と行動し、米軍に射殺され同一場所に埋葬されていたものである。

(98)

別紙 第9

サイパン島で収集した遺留品(認識票、印鑑)



ノ 枚

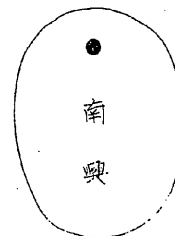


ノ 枚



ノ 枚

(表)



(裏)



(仲 松)

水晶の印鑑 ノ 箇

(99)

RG'-0018

0131

外交史料館

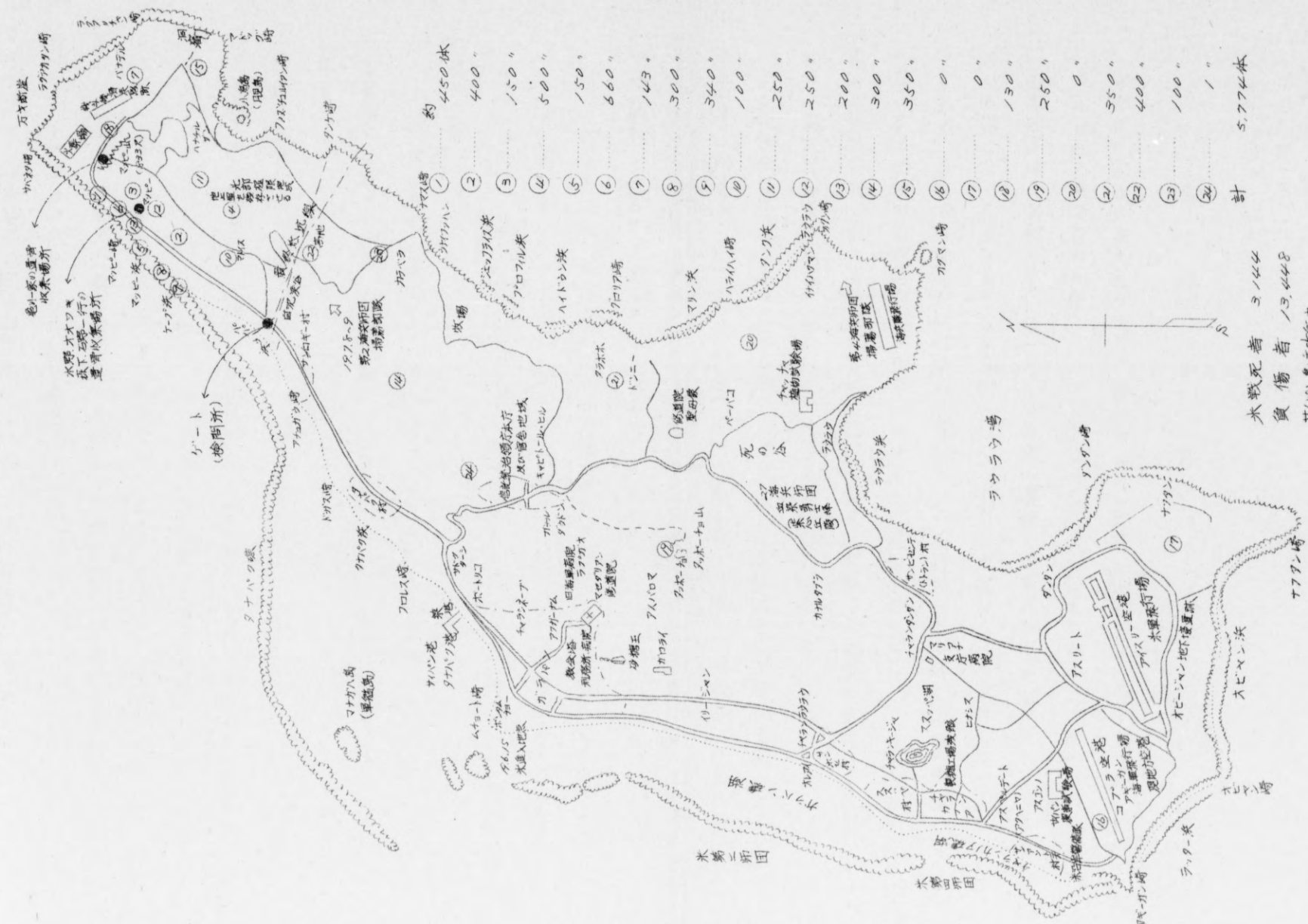
Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

サイパン島戦況図及び収容所位置図



水戦死者 3,144
負傷者 13,448
サイパン島連成兵力 200,000

計 5,774体

別紙 第ノ

(サイパン・デニアン)

追悼の辞

世界に平和がよみがえって二十有余年、遠く故国を離れたここサイパン島に静かに眠つておられる戦没者のみ霊に対し、日本政府を代表し謹んで申し上げます。

日本政府は、昭和二十八年二月に戦没者の遺骨の収束及び現地追悼のため、中部太平洋の戦場となった主な島々に派遣団をおくって慰霊を行ない、ご遺骨を故国日本にお迎えしたのでありますが、当時は諸般の事情から、旧戦場をあまり訪れることができませんでした。心ならずも一部の象徴的なご遺骨をお収めしたに過ぎませんでした。以来十五年徒らに歳月を経て今日に至りましたことは、祖国の繁栄を念願して散華されましたみ霊に対しまして誠に申し訳なく国民がひとしく心を痛めていたところであります。

このたび私たちは国民の切なる願いを背負い、日本政府を代表して祖国からあなた方をお迎えに参りました。あなた方はこの日をどんなにか待ちこがれておられたことでしょう。静かに眠を閉じれば、あなた方の在りし日の勇姿が浮び異郷にあった長年月の想い出を語りかける声か聞こえてくるようであります。

かえりみますれば、あなた方はこの方面の戦いにおいて絶対優勢の米軍を迎え撃ち、あらゆる困難に耐えて史上まれな激斗につぐ激斗に日夜を分たず鬼神のような奮戦を続けられ、ついに、祖国の空に想を馳せなから散華されましたことはまことに痛風の極みであります。

しかしながら祖国の繁栄をこい願ひ祖国に殉ぜられたあなた方の崇高な精神は、同胞の脳裏に深く刻まれており、子々孫々に語り継がれて永久に消え去ることはないであります。

祖国日本は、あなた方のご加護のもとに、あなた方のご遺志を体した国民の精進努力により、敗戦の悲境を完全に脱し平和と繁栄を築けるとともに、世界平和に寄与するためあらゆる努力を続けております。またあなた方が命盡きたるその瞬間まで兼いておられましたご子弟は、それぞれみごとに成長されて社会の中堅として活躍しておられ、與様年老いた父上、母上等近親の方にも、あなた方の国に殉じた業績を誇りとして力強く生きておられ社会から敬愛されております。

ここに、ご遺族各位の限らない思いをこめた言葉を代わってお供えいたしました。どうぞ故国

の香り豊かな味をお受けください。そして私たちと一語になつかしい故郷の山河のもと
にお帰りください。

全国民にかわりあなた方のご幸福を祈りつつ謹んで追悼のことばといたします。

昭和四十三年四月 日

中部太平洋方面遺骨収集派遣団

田 長 横 溝 幸 四 郎

(103)

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

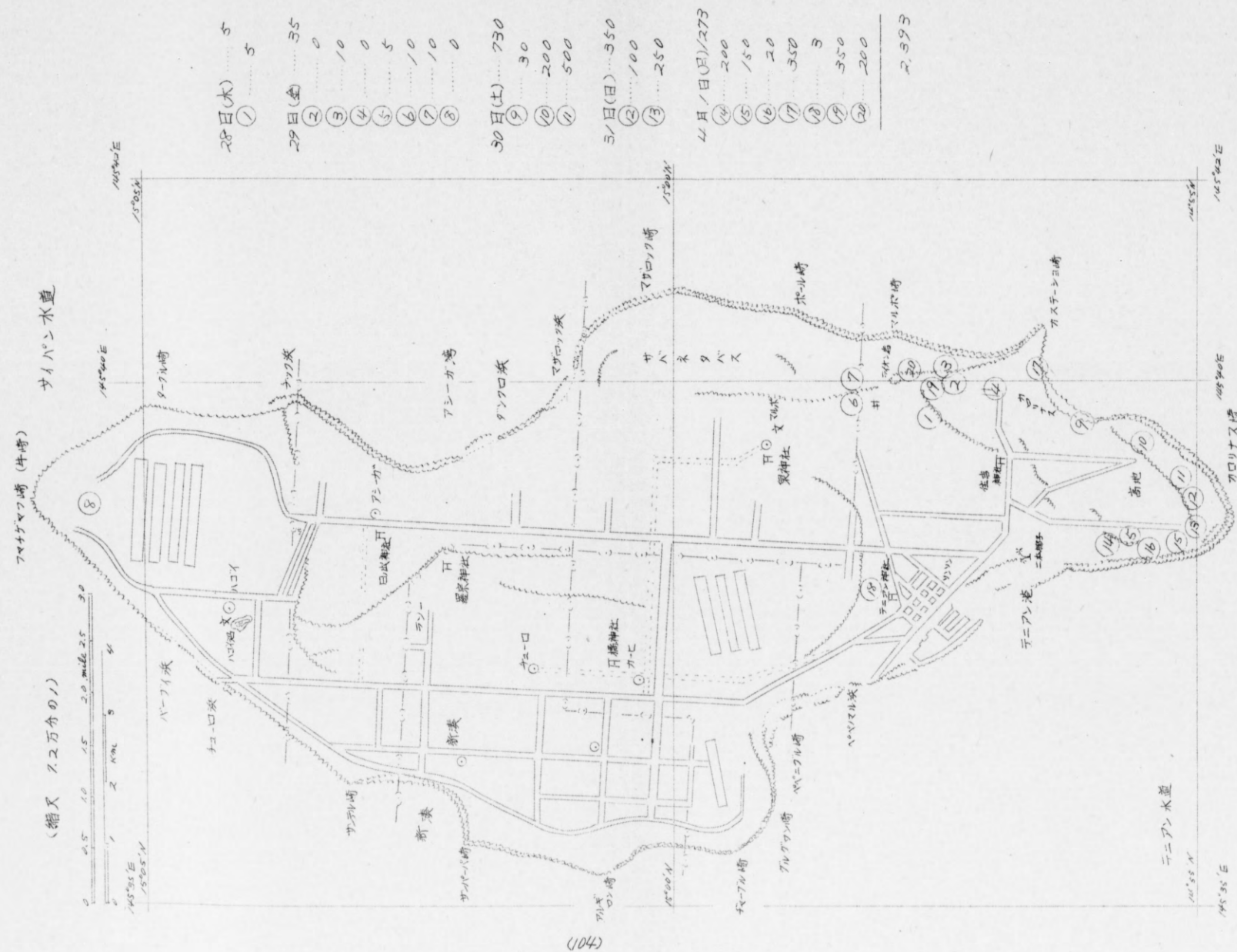
National Archives of Japan

RG'-0018

0134

別紙第ノス

テニアン島遺骨収集場所及び収骨数図示



別紙第13

(口タ)

追悼の辞

世界に平和がよみかえって二十有余年、遠く故国を離れたここ口タ島ならびに、その周辺に静かに眠っておられる戦没者のみ霊に對し、日本政府を代表し謹んで申し上げま

す。
日本政府は昭和二十八年二月に戦没者のご遺骨の収束及び現地追悼のため、中郷太平洋の戦場となった主な島に派遣団をおくって慰霊を行ない、ご遺骨を故国日本にお迎えしたのであります。當時は諸般の事情から、旧戦場をあまねく訪れることができず、心ならずもこの島に参ることができなかったのであります。以来十五年後のに歳月を経て今日に至りましたことは祖国の繁栄を念願して散華されましたみ霊に對しまして誠に申訳なく、国民がひとしく心を痛めていたところでありま

す。
このたび私たちは、国民の切なる願いを背負い日本政府を代表して祖国からあなた方をお迎えに参りました。あなた方はこの日をどんなにか待たこかれておられたことでしょう。静かに睡を閉じれば、あなた方の在りし日の勇姿が浮び異郷にあった長年月の想い出を語りかける声か聞こえてくるようでありま

す。
かえりみますれば、あなた方は、この方面の戦斗において、絶対優勢な米軍に相對し、あらゆる困難に耐えて日夜を分たず奮戦を続けられ、ついに祖国の空に想いを馳せながら散華されましたことはまことに痛風の極みであります。

しかしながら、祖国の繁栄をこい願ひ祖国に殉ぜられたあなた方の崇高な精神は同胞の脳裏に深く刻まれており、子々孫々に語り継がれて永久に消え去ることはないであります。

ましよう。
祖国日本は、あなた方のご加護のもとにあなた方のご遺志を体した国民の増進努力により敗戦の悲境を完全脱し、平和と繁栄を続けるとともに、世界の平和に寄与するた

め、あらゆる努力を続けております。またあなた方が命盡さる瞬間まで兼じておられ

ましたご子弟は、それぞれ、みごとに成長されて社会の中堅として活躍しておられ、異様

老いた父上、母上等近親の方々も、あなた方の、國に殉じた業績を誇りとして力強く生

きておられ社会から敬愛されております。

ここに遺族各位の限らない思いをこめた言葉を献じました。どうぞ故國の

香り豊かな味をお受けください。そして私たちと一緒になつかしい故郷の山河のもとに
お帰りください。

全国民にかわり、あなた方のご冥福を祈りつつ謹しんで追悼のことばいたします。

昭和四十三年四月 日

中部太平洋方面遺骨収集派遣団

代 表

(106)

RG'-0018

0137

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0138

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

RG'-0018

0139

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan